

国道18号線視距改良工事発掘調査報告書

せき かわ せき しょ あと
関川関所跡

1994

新潟県教育委員会

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

国道18号線視距改良工事発掘調査報告書

せき かわ せき しょ あと
関川関所跡

1994

新潟県教育委員会

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県教育委員会では、高速道路や国道バイパス建設及び国道拡幅工事等に伴う多くの遺跡発掘調査を実施してまいりました。

本書は国道18号線視距改良工事に伴って実施した、妙高高原町関川関所跡の発掘調査報告書です。

関川関所では江戸時代において全国50か所程あった関所の中でも、特に重視された「重き御関所」の一つであります。この調査によって、関所跡の石垣の構造が明らかになり、さらには関所関連の施設と思われる遺構も発見されました。特に石垣の構造に関しては、発掘例が少ないこともあります、今後の石垣構築の資料として広く役立てられるものと思います。

最後に本調査に多大なる御協力・御援助を賜った地元妙高高原町教育委員会、発掘調査計画段階から実施に至るまで、格別の御配慮を賜った建設省北陸地方建設局高田国道工事事務所に対しまして、ここに深甚なる謝意を表する次第です。

平成6年3月

新潟県教育委員会

教育長 本間栄三郎

例　　言

- 1 本報告書は新潟県中頸城郡妙高高原町大字関川311-1番地ほかに所在する関川関所跡の発掘調査記録である。発掘調査は、一般国道18号線の視距改良工事に伴い、新潟県が建設省から受託して実施した。
- 2 発掘調査は平成4年度に新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）に調査を委託したものである。
- 3 発掘調査は平成4年6月8日から8月21日まで実施し、整理および報告書作成にかかる作業は平成4年度に行い、平成5年度に報告書を刊行した。
- 4 関川関所跡において、視距改良工事に伴う住宅移転先の第一次調査が妙高高原町が主体となり県文化行政課によって、平成4年7月2日・3日に行われたが、図面・遺物実測図は本書に合わせて掲載した。
- 5 出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教委が保管している。遺物の注記番号は関川関所跡を「セキショ」として出土地点・層位等を併記した。
- 6 本書の作成は埋文事業団調査課第二係職員が当たり、藤巻正信（同第二係長）の指導のもと小田由美子（同専門員）が担当した。報告書の執筆は小田と三浦泰介（同専門員）が担当した。執筆分担は第Ⅲ章・第Ⅳ章1・2・3石垣・第V章土器・陶磁器・銭貨・第VI章が小田、第I章・第II章・第IV章3石垣以外・第V章石製品が三浦である。編集作業は小田が担当した。
- 7 本書は本文と巻末図版からなる。巻末図版は図面と写真で、おもな遺構・遺物をおさめる。
- 8 遺構番号は調査現場で付したものをそのまま使用した。番号は遺構の種別ごとに付している。種別は溝（SD）、土坑（SK）、柱穴（Pit）、その他（SX）で区別し、番号の先頭に付した。遺物番号はすべて通し番号とした。実測図・写真図版の番号も同じである。
- 9 遺物実測図は原則として繩文・平安・中世・近世の順に配置した。遺構に伴う遺物が少なかったため、出土遺構ごとの記述とはなっていない。本文末に遺物の観察表を付したので出土地点については表を参照されたい。
- 10 引用文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕で文中に示し、巻末に一括して掲載した。
- 11 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

落合幸民　　金子拓男　　坂井秀弥　　高橋　勉　　田代達雄　　田辺早苗　　中村由克
早津賢二　　渡辺ますみ　　妙高高原町　　妙高高原町教育委員会

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	4
A 北国街道	4
B 近世越後の関所	4
C 関川関所 1) 関川関所の成立 2) 関川関所の構成と任務	6
第Ⅲ章 調査の概要	8
1 発掘調査の方法と経過	8
2 普及啓発活動	9
3 整理作業	9
4 調査体制 A 発掘調査 B 整理作業	10
第Ⅳ章 遺跡	11
1 概観	11
2 層序	12
3 遺構各節	13
第Ⅴ章 出土遺物	20
第VI章 まとめ	24
《引用・参考文献》	26

図 版 目 次

図面

- 1 調査区域図
- 2 1区遺構実測図1
- 3 1区遺構実測図2
- 4 2区遺構実測図1
- 5 2区遺構実測図2
- 6 3区遺構実測図
- 7 宅地移転先第一次調査遺構実測図
- 8 石垣断面実測図
- 9 石垣平面・立面実測図
- 10 土器・陶磁器実測図
- 11 土器・陶磁器実測図
- 12 土器・陶磁器・石製品実測図
- 13 石製品実測図

写 真

- 14 関川関所跡全景航空写真
- 15 関所跡内現況／1区・石垣発掘状況／発掘作業風景
- 16 1区完掘状況／SD1完掘／SD1とSD4の土層断面切り合い状況／SD4石検出状況／SD4完掘
- 17 2区完掘状況／2区集石検出状況／Pit40／Pit28
- 18 集石4検出状況／集石4土層断面／集石4完掘
- 19 3区石検出状況／3区完掘状況／SX1石検出状況／SX1土層断面
- 20 関所跡石垣／石垣調査前の状況／石垣清掃後の状況
- 21 石垣完掘／石垣完掘上段／石垣上段溝状遺構（SD5）
- 22 石垣土層断面C-C'
- 23 石垣五輪塔（火輪）利用状況／石垣上段茶臼出土状況／石垣中段発掘状況／石垣中段土層断面B-B'
- 24 石垣中段石検出状況／石垣中段積石土層断面E-E'／石垣掘形状況
- 25 土器・陶磁器
- 26 土器・陶磁器
- 27 土器・陶磁器・石製品
- 28 石 製 品

挿 図 目 次

1	周辺の地形と遺跡分布図	3
2	江戸・佐渡間の三街道と越後の関所	5
3	関川関所平面図	7
4	現地説明会（写真）	9
5	土層断面図	12
6	関川関所石垣断面概念図	14
7	石垣掘形平面図・起伏図	15
8	銭貨拓影	22

表 目 次

1	周辺の遺跡一覧	3
別表 1	土器・陶磁器観察表	28
報告書抄録		

第Ⅰ章 調査に至る経緯

関川関所跡は北国街道（現国道18号線）の越後と信濃の国境に設置されたものであり、江戸時代においては加賀藩の前田氏をはじめとする北陸諸大名の参勤交代、佐渡産金の通過点として、とりわけ重要な関所の一つになっていた。

その関川関所跡は中頸城郡妙高高原町大字関川311-1番地はかに所在し、西側の一部が、国道18号線視距改良工事の法線内にかかることになり、平成2年度以降、県教委と建設省北陸地方建設局（以下、北陸地建と略す）との間で、調査に関する具体的な協議が持たれるようになった。その結果として、県教委は他の調査や職員数との関係から、とりあえず関所跡の概要を把握するために第一次調査を実施することとした。

第一次調査は平成3年5月15日・16日の2日間にわたって実施した。法線内に3×3mの基本トレンチを任意に設定し、人力によって地表から徐々に掘り下げながら遺構・遺物の有無を確認し、記録をした。その結果、石垣上段北側に設定した第1トレンチでは幅約40cmの2本の直交した溝が確認された。また遺物は南北溝の上面で珠洲焼の中世陶器片が検出された。石垣上段の南側に設定した第2トレンチからは30~65cm大の川原石や割り石を用いた、幅約1.4mの石列が6mにわたって確認された。遺物は珠洲焼の中世陶器、近世の陶磁器類が検出された。このようなことからも、石垣部分をはじめ、畠地部分にも関所関連の遺構が存在する可能性が高いという結論を得た。特に石垣に関しては残存状態も良好であった。

その調査結果をもとに、平成3年8月に再協議を行い、関川関所が県内でも屈指の規模と重要性を持った関所であること、国道を拡幅した場合、石垣がかなり失われ、遺跡としての価値が大きく減少する、ということを前提にして調整がなされた。その結果として、歩道の撤去、路壁の立ち上がり角度変更を行い、拡幅規模を当初の2分の1に縮小した上で第二次調査を行うことになった。調査面積は約600m²である。

その後、平成3年9月に第二次調査の日程・費用等に関して協議が持たれた。北陸地建からは平成3年度中の調査希望があったが、郷清水遺跡（新潟県中頸城郡中郷村大字福沢地内）の進捗状況、調査員人数の問題、さらには法線にかかる宅地の移転が4年度になるなどの点から、平成3年度実施は困難な状況にあった。結果として、関川関所の第二次調査は翌年度に持ち越され、埋文事業団が県教委の委託を受け、平成4年6月8日からの開始となった。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

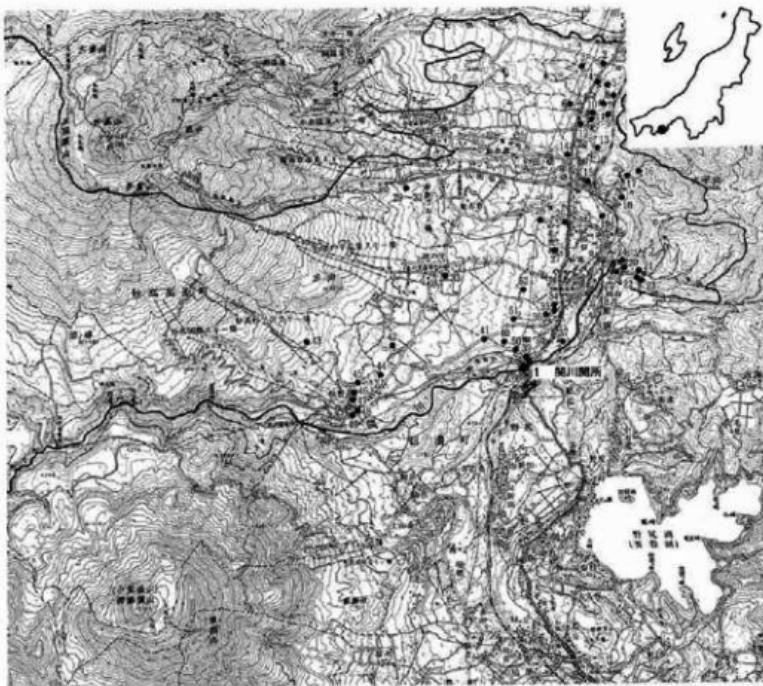
関川関所跡のある妙高高原町は、面積約127km²、人口約7,000人の新潟県南西部に位置する、観光産業を主体とした県内有数のリゾート地である。妙高山（2,454m、複式火山）の周辺は日本を代表する景勝地であり、上信越高原国立公園内に含まれている。その裾野には温泉、スキー場が点在しており、春から秋にかけては登山者やハイカーが訪れ、冬は一面がゲレンデとなり、多数のスキーパークが訪れる。

行政区画としては中頸城郡に属し、北側から東側にかけては妙高村、西側は糸魚川市、南側は長野県上水内郡信濃町に境を接している。また同町は、国道18号線妙高野尻バイパス、上信越自動車道の建設が予定されており、今後観光地としての更なる発展が期待されている。

今回、発掘調査の行われた関川関所跡は妙高山の広大な裾野の東端、中頸城郡妙高高原町大字関川311番地1ほかに所在する。上信越国境に源を発して日本海に注ぐ関川の、南西に突き出した左岸段丘上に立地しており、付近の標高は570m前後となっている。

この地域は、東側に妙高山、南西側に黒姫山（2,053m）、南東側に斑尾山（1,382m）といった火山に囲まれた山嶺地帯となっている。これらの火山の中でも特に妙高高原町と関わりの深い妙高山は、過去数度にわたって噴火している。最初は約30万年前までさかのぼり、一番新しい噴火は約4,200年前（縄文時代中期末葉）となる（平津1990）。この数回の噴火活動ごとに、おびただしい量の火碎流や岩屑流が周辺の地域を覆い、人間の生活の場としては使用できない状態になったであろうことは想像に難くない。しかしながら、縄文時代の遺跡の分布をみると、周辺の山地よりも妙高山麓の方が圧倒的に多いことがわかる。これは、妙高山が豊富な水に恵まれた、豊かな大地を人々に提供してきた結果であろう。その恵みは現在にも受け継がれ、大きな集落のほとんどは妙高山麓に位置している。

また、文化的な面では、関川関所跡の南東方向3kmの地点には、ナウマン象・大角鹿の骨や旧石器時代の遺物が検出されている野尻湖があること、北陸の文化と中部高地の文化交流の接点に位置していること、といった点からも、先史以来、多くの文化の影響を受けてきた地域であるという特色がある。これまで妙高高原町地内で行われた発掘調査は、昭和49年（県教委・町教委）・58年（町教委）に行った兼保遺跡のみであった。しかし、平成5年度以降は調査が連続する予定であり、これらの調査によって当地文化の諸相の解明が期待される。



第1図 周辺の地形と遺跡分布図 国土地理院 1989年発行 1911年測量妙高山
1983年発行 1912年測量戸隠
(1:50,000→1:100,000)

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	開川園所跡	平安・中世・近世	19	塙 塚	?	37	開川船跡	中世
2	小二俣古戰場	?	20	兼 保 A	續文(前~後)	38	仲町五輪塔群	?
3	熊 宮	續文(後)・平安	21	兼 保 B	續文(中~後)	39	仲町五輪塔八群	?
4	西 熊 宮	續文	22	兼 保 C	續文(中~後)	40	帶 原	續文
5	西熊宮五輪塔群	中世	23	兼 保 D	續文	41	栗 / 木 板	續文(後・後)
6	外 墓	中世	24	兼 保 E	續文(中~後)	42	谷 内 墓	續文(後)・平安・中世
7	南 前 漢 A	不明	25	兼 保 F	續文(中~後)	43	ヤ ナ ダ ラ	近世
8	南 前 漢 B	不明	26	東 沖	續文・平安	44	高 野	近世
9	鉢 跡	中世	27	宮 北	平安	45	寺 尾 山 古 墓	?
10	鏡音堂五輪塔群	中世?	28	津 沢	平安	46	マ ゴ ジ ロ バ	?
11	鏡 音 堂	續文	29	田口山 1 号塚	?	47	鹿 田	續文
12	西 鏡 音	續文	30	田口山 2 号塚	?	48	水沢五輪塔群	?
13	伏 見	續文(前~後)・齊生(後)	31	田口山 3 号塚	?	49	移 舌 泉	續文
14	彌 ナ シ	續文	32	田口山 4 号塚	?	50	大 顯	續文(佐助朝・早朝)・平安
15	田 切 城 跡	中世	33	大 中 嵩	吉始	51	開川谷 内 A	續文(早・前)・平安
16	戲 や 城 跡	中世	34	北原五輪塔群	?	52	開川谷 内 B	續文(早・前)・平安
17	大 詰	續文	35	北 原	不明			
18	上 の 台	平安	36	中 / 沢	續文(前)・平安			

2 歴史的環境

A 北国街道

近世の街道は、江戸を中心とする東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道のいわゆる五街道と、それ以外の脇街道（脇往還）から構成されていた。関川関所は、その脇街道の1つである北国街道（現国道18号線）に築かれた関所である。

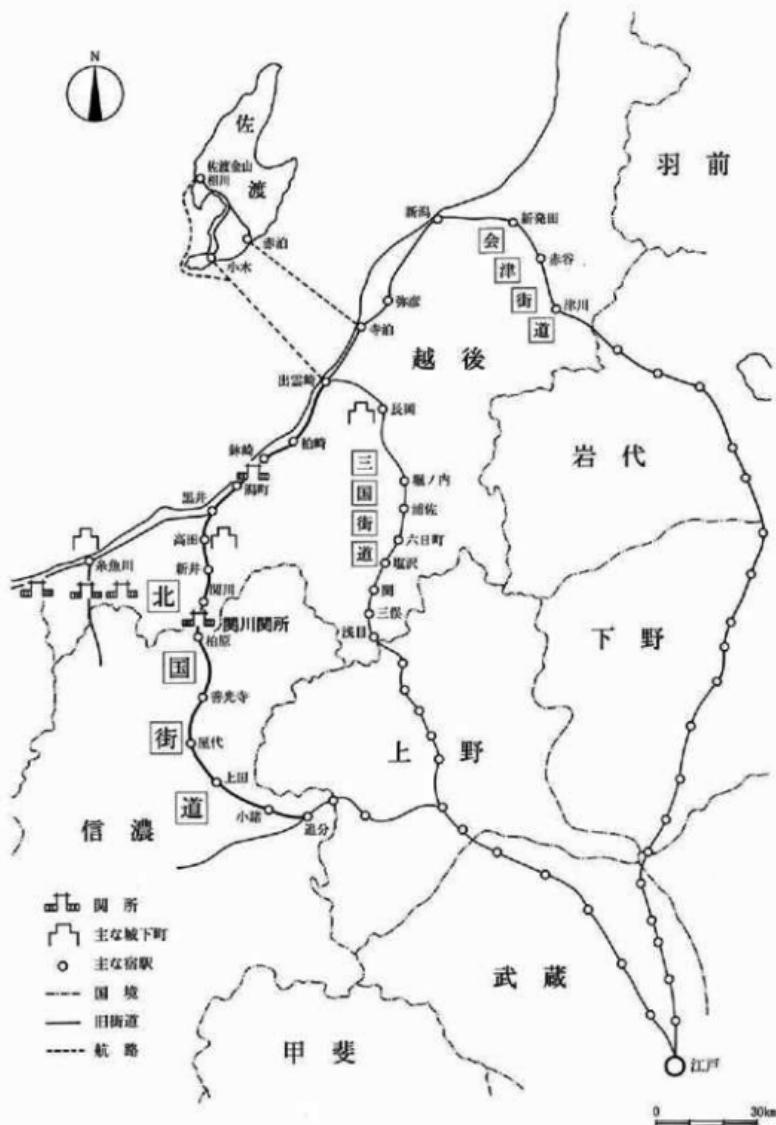
この北国街道は、中山道追分宿から分岐し、越後高田までをさしている。しかし、佐渡産の金銀の輸送路としてその重要度が高まってからは、佐渡への渡海場である出雲崎までをさすよう¹⁾になった [山本・久保田1981]。

当時の越後の主要な街道には北国街道の他に、三国街道、会津街道があった。この3つの街道は、いずれも脇街道ではあるが、江戸と佐渡金山を結ぶ公道として「佐渡三道」と呼ばれ、五街道に次ぐ、重要な街道であった。の中でも北国街道は、他の二道に比べ距離は長いものの、比較的平坦であり、安全度も高く、一番多く利用されたようである。また、加賀藩前田氏をはじめとする、北陸諸大名の参勤交代の通路としても利用されており、越後の街道の中でも特に重要な街道であったと言えるだろう。

B 近世越後の関所

近世において、江戸幕府は幕藩体制維持政策の一環として、交通の要所に関所や番所（口留番所）を設置した。その関所の数は時代により多少の増減はあるものの、延享2（1745）年には全国で53を数える。そのうち、交通量や任務の軽重によって、「重き御関所」と「軽き御関所」とに分けている。「重き御関所」は20か所あったが、越後国内の関川、市振（青海町）、鉢崎（柏崎市）、山口・虫川（糸魚川市）の5つの関所のうち、「重き御関所」は関川関所だけであった。その理由は前項にある北国街道の重要性と、関所の位置関係による。まず高田藩の管理下にあった鉢崎・市振の両関所の位置をみると、鉢崎は佐渡産金は通過するものの、北陸諸大名の通過はない。一方、市振は鉢崎の逆になる。故に、関川関所は佐渡産金も北陸諸大名も通過するわけであり、必然的に交通量も増え、重視されるわけである。残りの山口・虫川の関所は糸魚川藩の管理下にあった。この二関は信州松本方面への出入りを取り締まるために設けられた関所である。戦国時代末期に上杉謙信が川中島の戦い後、領内防御のために設置したのが、その始まりと言われている [丸山1986] [波辺1984]。

1) 北国街道の区間にについての説があるが、広辞苑では「北陸街道と中山道を連絡する街道。信濃国分で中山道と分れ、小諸・長野を過ぎて直江津で北陸街道に合する」と記載されている。



第2図 江戸・佐渡間の三街道と越後の関所

〔妙高高原町史編集委員会1986〕 加筆・修正

C 関川関所

関川関所が「重き御関所」とされたことは前項でも触れておいた。江戸時代では、この「重き御関所」20関のうち17関は、女性（出女）が通行するさい、幕府留守居役の手形を必要としていた。その17関の中に関川関所も含まれており、この点からも、関川関所がいかに重要な関所であったかが分かる。以下では、その成立、構成等に関して触れてみる。

1) 関川関所の成立

天正2（1574）年、上杉謙信は青野関を関川に移したという。これが関川関所の始まりといわれている。もっとも戦国時代の関所は江戸時代の関所とは役割が違い、軍事的、経済的な面から設置されている。

その後の経緯としては、高田藩主松平光長が承応2（1653）年に口留番所を置いている。口留番所といつても、上番（関所責任者）には100石取り以上の高田藩士8名、更には女性の通行人を取り調べる人見女も配置されており、番所としては相当整備されていたようである。そして、幕府管下の関所となるのは、文化8（1811）年の「関川村明細帳」に「一、口留番所、是ハ承応年中、元禄十丑年本御関ニ相成、川原番所宝暦年中金式分ツ、下し置かれ候、」とあるように、元禄10（1697）年からとなっている（妙高高原町史編集委員会1986）。

2) 関川関所の構成と任務

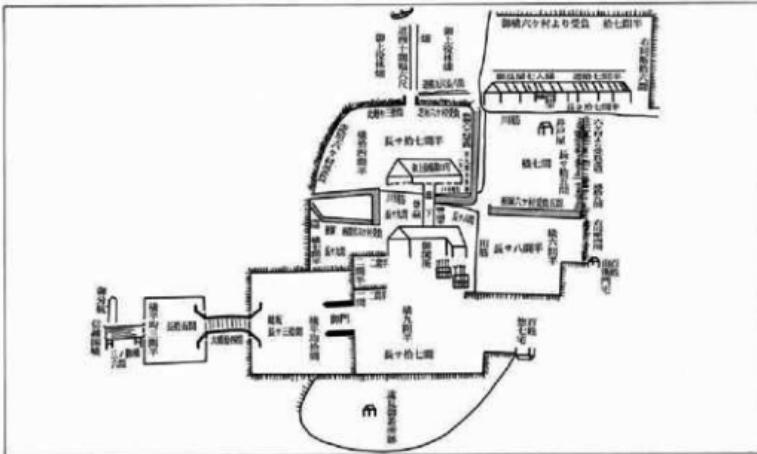
高田藩は幕府の命に従い、藩士を関所の役人として派遣している。派遣された藩士は2名であり、「上番」という関所の直接責任者の地位についた。上番の下には足軽が数名、それに人見女1人がいた。以上が常勤である。このほかに非常勤として郷足軽が10名おり、その中から郷足軽小頭が1名選ばれていた。上番は100石取り前後の藩士であり、任期は当初10年を越える例もあったが、後に5年、3年へと短縮されていった。人見女は関所通過の女性を監視する役目を持ち、関川村内の百姓の妻の中から郷足軽小頭が選び、上番がこれを任命した。郷足軽は関所近村の村役人クラスから選ばれており、この中から小頭を選任、他方では小頭が郷足軽を選定したりした。

天和3（1683）年の「天和検地帳」によると、御関所の屋敷が20間×15間、御関所裏の屋敷（関所役人の居宅地）は24間×26間のものがあった。なお、関所には緊急時の対応のために、弓、鉄砲、長柄槍、三道具（突棒・刺股・袖摺）、早縄、手綱鍵、揚提灯、水桶、大綱などが備えられていた。このような施設を維持していくために、関所付村として、関川村・上原村・田切村・二俣村・田口村・杉野沢村の6か村が決められていた。これらの村々は大改築などの時は除くが、関所の掃除、関所長屋の補修、芝垣の雪囲いといった作業に、必要な人足を出すことになっ

ていた〔丸山1986〕。

関川関所の任務は、幕府の指示条目を遵守することが第一である。しかし、諸国の関所が一様に同じ任務であるとは限らない。関川関所の場合、「諸国御関所覚書」にある任務を要約すると、①女・禪尼・尼・比丘尼・髪切・少女・亂心・手負・首・死骸については、幕府留守居役の手形で通す。しかし、上方から北国筋へ行く者は、木曾福島関所で書き替えた手形を出せば通関できる。②武器・鉄砲に関しては改めない（碓氷関所や江戸周辺の関所で点検するため）。③夜間の通行禁止。ただし、加賀・富山・大聖寺の三藩の飛脚、佐渡の御金荷は夜間通行できた。④手負・乱心・囚人・死骸等は幕府留守居役の手形が必要だが、碓氷、市振、鉢崎の関所を通る時は領主の手形で通行できた。ただし、関川関所近村の女性は領奉行発行の「女老人通札」で野良仕事に行くことができた。このほかにも高田藩独自で、昼夜折々の関所の内外点検、番所前での買物禁止、関所入足の私用禁止、番所内での飲酒博打の制禁等、細かな条目を定めている〔妙高高原町史編集委員会1986〕。

このように江戸時代を通して、関川関所の果たした役割は実に大きいものであった。しかしながら、幕末に及び、世情騒乱となり、関所での取り締まりが不可能なほど、人の往来は激しくなっていく。その後、明治2（1869）年に諸国関所廃止令が出され、関川関所も廃止されることになる。なお、その跡地は民有地として払い下げられ、内部は池や小山を配置する庭園が造られた。現在も、その池や小山は残っており、おそらく、その部分に関所の役所があったと思われる。しかし、当時の石垣や用水路が残っている箇所もあり、往時の関所の姿を偲ばせてくれる。



第3図 関川閣所平面図 [山本・久保田1991]

第Ⅲ章 調査の概要

1 発掘調査の方法と経過

本遺跡は国道の視距改良による道路拡幅工事に伴ったもので、調査範囲が非常に狭長となつたため、グリットを設定せず、航空写真測量の基準地点をもとに発掘調査を行つた。調査範囲は道路等によって分断されていることから、便宜的に調査範囲を1区から4区までと石垣部分とに分けて調査を実施している。各区は畠地や宅地等現況が異なるが、攪乱を受けている部分が多くあった。遺物包含層でも遺物の出土は少なく、地山直上で若干の遺物の出土がみられただけである。遺物は遺構に伴わないものはすべて地点で取り上げた。

当初、発掘調査は調査対象地域の宅地移転が未了なため、2次にわたって行われる予定であったが、調査が長びいたため、宅地移転後、継続して調査を行うことができた。しかし、調査範囲が道路・宅地等によって分断されているため、広い面積での調査を行うことができず、非能率的であった。また、調査範囲の狭さ等から重機による表土掘削は行えず、表土からほとんど人力による発掘調査となつたほか、排土を仮置きする場所がなく、重機・ダンプ・人力によつて排土の運び出しを行つたため、時間と費用が大幅に超過した。

調査経過は以下のとおりである。

- ① 石垣部分の草刈り・清掃を行い、石垣の写真測量（立面図）を業者に委託して実施した。
- ② 石垣中段部分をトレンチによって調査した結果、人為的に整地されていることがわかつたため、基礎部分まで掘削を行つた。
- ③ 1区の調査を行い、石垣と平行に延びる石積みと浅い溝状遺構を検出した。1区ではほかに多くの柱穴や溝が存在した。石垣中段の石積みの実測が手取りでは時間がかかりすぎるため、再度、航空写真測量を実施した。
- ④ 石垣を立ち割り調査した後、石垣裏込めの遺物を検出するため地山まで人力で掘削し、石垣の掘形を確認した。排土処理は重機で行い、ダンプで搬出した。
- ⑤ 4区の調査は重機と人力を併用した。遺構の検出はなく、遺物がわずかに出土した。
- ⑥ 発掘調査中に立ち退いた宅地跡の2区を調査する。近世遺物のほか、平安時代の遺物が若干出土した。1区と同様に柱穴が多いほか、集石が3基検出された。
- ⑦ 遺跡の延長を確認するため、当初予定になかった3区の調査を行う。性格不明遺構（S X 1）から多量の近世遺物が出土した。

2 普及啓発活動

妙高高原町では発掘調査が行われたことが少なく、町民の関心も低く、作業員募集にも影響があった。そのため、今回の発掘調査では、できるだけ多くの町民に埋蔵文化財について理解してもらえるように、普及啓発活動に努力した。

発掘調査の様子を各戸配布の『議会だより』No.113・114に掲載してもらったほか、新潟日報社の取材を受け、新聞紙上で紹介した。また、7月19日には現地説明会を実施し、有線放送で見学を呼びかけた。しかし、町民の参加者は少なく、関心の喚起にまではいたらなかったようである。このほかに町民対象ではないが、建設省主催の小学校5・6年生の児童を対象とした「道路見学会」の一環として、関川関所跡の発掘調査現場を見学してもらった。

関川関所跡は近世の貴重な遺跡で保存状態もよく、今後の整備などが期待される。発掘調査では関心を高める所までいかなかったが、この報告書が少しでもその役に立てば幸いである。



第4図 現地説明会(写真)

3 整理作業

関川関所跡の発掘調査終了後、妙高高原町の東浦遺跡の発掘調査に入り、11月下旬に現場作業を終えた。12月中は平成4年度調査の基礎整理作業があったため、本格的な整理作業に入ったのは翌平成5年1月からである。

経過 出土遺物の洗浄・注記は発掘現場で全て実施した。また、図面・写真的整理も発掘作業に並行して進め、残ったものは現場終了後に事業団本部で行った。本格的な整理作業は1月から3月までを要した。日々雇用職員は配置せずに現場担当職員3名がそのまま整理に当たったが、1月下旬からは日々雇用職員1名を増員した。

遺物の実測は職員の指示のもと、日々雇用職員が行ったが、このほかの作業は全て職員が分担して当たった。

4 調査体制

A 発掘調査

第一次調査

調査期間 平成3年5月15日～16日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）

調査職員 本間信昭（文化行政課埋蔵文化財係長） 坂井秀弥（同主任）

第二次調査

調査期間 平成4年6月8日～8月21日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

調査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管　理　藍原 直木（専務理事・事務局長）

渡辺 耕吉（総務課長）

茂井田信彦（調査課長）

庶　務　藤田 守彦（総務課主事）

調査指導 藤巻 正信（調査課第二係係長）

調査担当 小田由美子（調査課第二係専門員）

調査職員 三浦 泰介（同 専門員）

佐藤 执二（同 嘱託員）

なお、第二次調査中の平成4年7月2日から3日にかけて、妙高高原町主体で開所内の宅地移転先の第一次調査が行われた。遺構・遺物も検出されたが、遺物包含層まで堆積が厚いため第二次調査は実施せず、深度に留意して建築が行われることになった。このため、遺構・遺物については本報告に合わせて報告してある。

B 整理作業

整理期間 平成4年1月4日～3月31日

主　　体 新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）

整理・報告 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 本間栄三郎）

管理以下は、調査職員佐藤執二（調査課第二係嘱託員）に替わり、木村孝一（同嘱託員）が加わったほかは、第二次調査時と同じである。

第IV章 遺 跡

1 概 観

今回の発掘調査は、関川関所跡の西側端部にあたると考えられるわずかな部分しか調査することができず、関所の全体像を把握するまでにはいたらなかった。しかし、関所に伴う石垣の残存状態が良好で、立ち割り調査と基礎部分の調査まで行うことができた。石垣自体の造りは比較的簡単で、築城等に用いられる石垣の裏込めの栗石（ぐりいし）等は見られない。しかし、基礎工事は配石や溝等によって堅固に行われ、その上部に盛土が何層か施され、整地されている。出土遺物の相違等から基礎部分の構築が石垣より古くなると思われ、改築の可能性も考えられる。

石垣裏側から出土したのは18世紀後半から19世紀代の陶磁器が多く、裏込めに利用されたというよりも廃棄された状態に近いものであった。石垣の基礎部分からは、18世紀後半のものがわずかに出土しているが、19世紀代のものは含まれていない。石垣は基礎部分を除き、関所の廃絶後に構築された可能性が考えられる。

石垣内側では多くのPitと配石溝・集土石坑・土坑等が検出された。Pitは根固め石の入るものもあり、多くは柱穴と考えられるが、調査範囲の幅が5m前後しかなかったため建物としてとらえられるものはなかった。同じ理由で、配石溝も建物に伴うものかどうかは確認できなかつた。

遺物は平安時代の土師器・須恵器、中世の輸入陶磁器・珠洲焼等と、関所と同時期と考えられる近世の陶磁器、ほかに近代の陶磁器等が出土している。平安時代・中世・近世と断続的に営まれた遺跡である。遺構からの出土は少なく、石垣の裏込めと性格不明遺構からまとまって出土したばかりは少量である。また、耕作が深くまでおよんでいることと、遺物量が少なかったため、遺構の中で時期決定できたものは少ない。

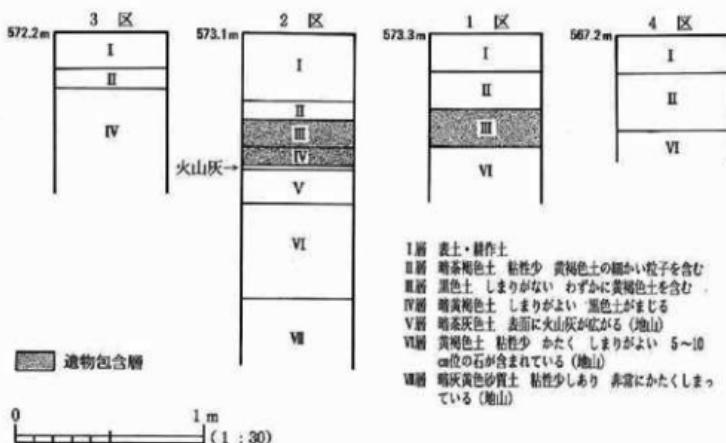
1区・3区からは近世の遺物しか検出されなかったが、2区では出土遺物からPitが平安時代と近世のものに分かれるようである。4区からは近代の遺物と縄文土器が1点出土しているが、遺構は検出されず、また整地等も行われた形跡はなかった。したがって、全体図に位置を記しただけで部分的な図は省略した。

2 層 序

調査地域は関川の段丘面で、北から南へゆるやかに傾斜し、石垣部分で段丘の縁辺部にあたり、急な傾斜となっている。石垣は地形を利用して造られているといえる。今回調査した各区はそれぞれに現況が異なり、層序も安定したものではなかった。北から各区について説明する。

3区は畠地で用地買収後は荒地になっていたが、地山まで平均30cmしかなく、明確な遺物包含層は残っていなかった。2区の現況は宅地で一部に地山に達する攪乱が認められたが、安定した遺物包含層が残っていた。また、2区では遺物包含層が2枚に分層でき、上層は近世の包含層、下層は平安時代の包含層となっていた。しかし、遺構の検出は地山面でしか行えず、遺構を各時期に明確に分けることはできなかった。また、ともに遺物の出土は希薄であった。1区は現況では畠地で、ごみ穴等による攪乱も多かった。地山直上に遺物包含層が存在したが、遺物量は希薄である。4区も同様に以前は水田として利用され、現況では畠地となっており、耕作の影響が大きく、遺物包含層は検出できなかった。石垣部分は石垣を築くためにかなりの削平・盛土等を行っているが、詳しくは各節で後述する。

2区は地山直上で火山灰が認められたため、深掘りを行い、地山の状態を確認した。この火山灰は平安時代に焼山の噴火によってもたらされたものと考えられる。また、ここでいう地山とは約8,000年前の妙高山の噴火に伴う岩屑流である。岩屑流の下に黒褐色の層が認められた部分があったため、調査の最後に確認をしたが、無遺物層であった。



第5図 土 層 断 面 図

3 遺構各説

石垣

石垣については構造の点でいくつかに分けた方がわかりやすいと思われるが、第6図に示したように、石垣、上部構造、石垣裏込め、基礎構造に分けて記述する。

石垣（図版8・20）

関川関所跡は現状では杉等の樹木に覆われ確認しにくくなっているが、関川に面して石垣が南東方向から北西方向にかけて築かれ、現在国道18号線が通っている場所にも、石垣が延びていたことが確認されている。総延長は不明である。国道18号線からおよそ16mのところに張り出し部が造られている。石垣は高さ約2.8mで、石積みの面が残っている部分の高さは約1.6mである。石垣の保存状態は良好で、石垣の積み方は自然石をそのまま利用する野面積みと呼ばれる方法によっているが、見た目は乱雑である。張り出し部の角部には角石（すみいし）が積まれているが、石垣によく見られる算木積みにはなっていない。石垣の石には五輪塔の一部等が利用されていた（図版23）。現状では、降雨や草木の影響で崩落している部分や腹の膨張が見られる。しかし、今回調査の対象になった石垣の面（図版9、石垣立面図1～15）と張り出し部（図版9、石垣立面図15～17）の石垣の面は積み方が若干異なり、15～17の石垣の方が丁寧に積まれ、崩れもほとんどない。

上部構造（図版8・9・21）

石垣の上段には石垣と平行に並ぶ配石と溝状遺構（SD5）が検出された。配石は石垣から約1.6m程内郭に入り、一段高く築かれ、溝状遺構（SD5）は配石にはば並列している。配石はおよそ2.5mの幅で、高さ約0.8mに石が積まれている。検出状況では石垣と配石が二段積の石垣のように見えている（図版21）。調査状況では配石に伴って、盛土が行われているようである。覆土は非常に薄く、10cm程しかなかったが、この配石が造成当時、露出していたものか、盛土に覆われていたものは不明である。配石に用いられている石は石垣に使われているものとほぼ同じ大きさである。中には茶臼や石臼の転用も見られた（図版23）。溝状遺構（SD5）は最大幅約2.3m、最小幅約1.0mで、遺構確認面からの深さは約20cmである。配石側の立ち上がり部分に石が5個据えられ、石列を成していた。この石列は溝状遺構（SD5）の立ち上がりに沿って延びていたものと考えられる。覆土の状況は一部擾乱にかかっているため、はっきりしなかったが、配石と同時期と考えている。また、溝状遺構（SD5）の中からはPit等はほとんど検出されず、1区で遺構が存在した時には、溝状遺構（SD5）として機能していたものと考えられる。

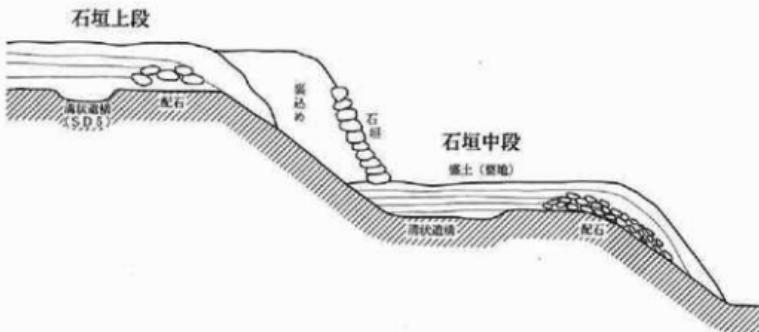
石垣裏込め（図版8・22）

石垣はただ石を積むという単純な構造ではなく、崩落を防止する堅固な基礎構造を内部にもつものである。石垣の裏側には一般的に裏込めが見られ、栗石と呼ばれる拳大の石が多量に詰めこまれている場合が多い。今回発掘調査をした関川関所跡の石垣の裏込めには明確な栗石は見られなかった。石垣のすぐ裏面では暗茶褐色のしまりのない土が小砂利とともに詰められ、さらに内側には暗茶褐色のしまった土が大小の石と共に詰まっていたが、石は量的に少ない。石垣の積み方は非常に脆弱な造りになっている。石垣の裏込めからは、石垣を構築する際に投棄したと考えられる状況で、18世紀後半から19世紀代の陶磁器が多量に出土した。

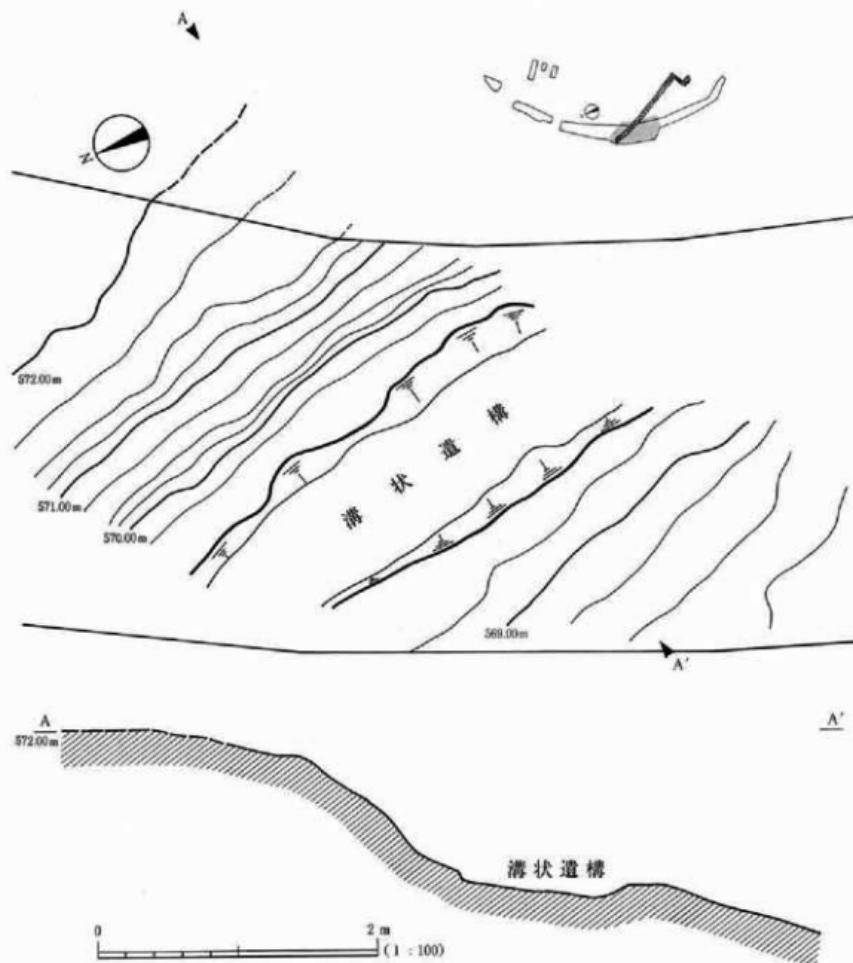
基礎構造（第7図・図版8・9・23・24）

石垣は関川の段丘線辺部の段差を使った、自然の地形を利用したものである。石垣は段丘の斜面を利用して積まれている。基礎構造には根石や土台木等は使われず、溝状造構と配石の上に5～6層の盛土が行われ、整地されているのみである。溝状造構は幅約2.5m、深さ約10cmで、石垣の真下に石垣と平行に掘削されている。この溝状造構と石垣上段の溝状造構（SD5）は形状や規模が類似しているため、同時期に造成された可能性がある。溝状造構底部は、非常に固くしまっている。酸化したように赤褐色を呈していたが、自然の状態でも非常に酸化しやすい土壤¹⁾という見解があるため、原因は単純には判断できない。溝状造構底部付近から土師質土器が出土している。溝状造構の外側には配石が行われているが、これは上部構造の配石の石とは異なり、割れ石で拳大位のものが使われている。これは配石というよりは単に石を積んでいるだけという状況である。この上に何層にも分層できる約0.6m前後の盛土が行われ、石垣の中段が造られている。6層から、18世紀後半の陶磁器が出土している。

1) 早津賢二氏の御教示による。



第6図 関川関所石垣断面概念図



第7圖 石垣掘形平面圖・起伏圖

SD 1 (図版2・16)

1区の北部を北東から南西方向に延び、SD 6に切られて1.5m程過ぎた所から南東の方向に屈曲している。さらに法線外に抜ける手前でSD 4に切られている。底部のレベルは北から南にかけて低くなる。幅は70~100cm、深度20~30cm、延長は約10mを測り、断面形は扁平なU字形である。覆土は暗茶褐色土の1層のみであるが、部分的に石がぎっしり投棄されており、人為的に埋められたものと考えられる。遺物はまったく出土しなかった。本溝は重複関係から、SD 4・SD 6より古い。

SD 2 (図版2)

1区の北部、SD 1とSD 6を結ぶように、北西から南東の方向に延びている。SD 3とは隣接しており、東端で合する。なお、東側半分は擾乱されている。SD 1とSD 6との重複関係は不明である。幅60~80cm、深度10~15cm、延長2mを測る。覆土はSD 1と同様の暗茶褐色土である。遺物は出土していない。

SD 3 (図版2)

1区の北部をほぼ南北に延びる。北端はPit26、南端はSD 2と重複しているものの新旧関係は不明である。幅35~40cm、深度5~8cm、延長2mを測り、非常に浅い溝である。覆土は暗茶褐色土。しまり具合は悪くフカフカしている。遺物は出土していない。

SD 4 (図版2・16)

1区の中央部をSD 1を切って北東から南西方向に延び、SD 5の手前で屈曲する。その後SD 5を切り北西方向に延びる。ただし、本溝の西端に2.3m×1.0m大の石が埋没しており、石以西の流路は確認できなかった。幅60~70cm、深度20~35cm、延長6mを測り、断面形は逆台形をなす。底部レベルは東から西へと低くなっていく。覆土は暗褐色土の1層で、しまり具合はよくない。疊が溝を埋めるように投棄されており、人為的に埋められたものであろう。遺物は出土していない。切り合い関係から、本溝はSD 1・SD 5より新しい。

SD 5 (図版2・9・21)

1区の南部を南東から北西にかけて、調査区を横断するように延びる。幅230~100cm、深度20~45cm、延長5.5mを測る。底部レベルは南東から北西にかけて低くなり、部分的に段を有する。また、上端ラインに沿って35cm~50cm大の石を並べた、配石と思われるものが検出されている。覆土は主軸より北側半分は擾乱されているが、3つに分類できる。1層が暗褐色土、2層が黄褐色土、3層は茶褐色土である。そのうち、しまりがよいのは2層のみである。切り合い関係から、本溝はSD 4より古い。遺物は出土していない。

SD 6 (図版2)

1区の北部を北西から南東に延び、西端から2.5m程の所で東に屈曲している。屈曲後は一部擾乱部分があるが、そのまま調査区外に延びていくものと思われる。幅60~80cm、深度18~

25cm、延長5.5mを測る。断面形は逆台形をなす。底部レベルは北西から南東にかけて徐々に低くなっていく。覆土は2つに分類できるが、暗赤褐色土を主体とする土層である。この上部には礫が投棄されており、下部は小砂利が多く混入している。切り合い関係から、SD1より新しい。他のSD2・SD3との新旧関係は不明である。遺物は出土していない。

集石1(図版2)

1区、SD6内のSD1との重複部分からPit27にかけての、東西約150cm、南北約70cmの範囲に集中する。遺物は近世陶磁器1片が出土している。焼土、炭化物等の分布は見られない。土層断面からみると、SD6の覆土(暗赤褐色土)の上に暗黄褐色土の層が存在する。その層は本集石に伴うものであり、このことからもSD6が廃棄され、埋め戻された後に本集石が構築されたものと思われる。礫は投棄された状態というより、積み上げたような状態になっている。

集石2(図版6)

3区のほぼ中央部で検出された。約15cm×10cm大の礫が東西70cm、南北60cmの範囲に集中する。下部施設として径100cm、深度25cm程の浅い土坑が存在する。土坑の覆土は暗茶褐色土であり、礫が多量に含まれている。人為的に埋め戻されたものと思われる。

集石4(図版4・5・18)

2区の北部西端に検出された遺構である。大きいもので約30cm×20cm大、小さいもので10cm×10cm大の礫が東西140cm、南北150cmの範囲に集中する。遺物はまったく検出されていない。下部施設には径100cm、深さ14cm程の土坑を有しており、その土坑の底部直上まで礫が詰まっている。

集石5(図版4・5)

2区の北部東端に検出された遺構である。大きいもので40cm×30cm大、小さいもので15cm×20cm大の礫が東西130cm、南北150cmの範囲に集中している。ただし、壁断面にも多数の礫が混入していることから、南に向かって範囲が広がるものと思われる。遺物は中世の土師質土器が数片出土している。下部の施設として深度5~7cmの浅い土坑を有している。しかし、南側は調査区壁で切られ、西側は攪乱をうけている状態であり、平面での形状は不明である。ただし、土坑底部には径55cmで深度21cm・径25cmで深度30cm程の2つのPitが確認された。

集石6(図版4・5)

2区の南部西端に検出された。30cm大から15cm大の礫が、東西120cm、南北100cm程の範囲に集中している。下部はSD8であり、幅70~80cm、深度9~15cmを測る。北東から南西に延び、途中屈曲して南東に方向を変え、法線外に抜ける。なお、北端は屈曲部から1.5m程の所で消滅している。本集石はSD8の屈曲部分から法線外に抜けるまでの間に投棄されたような状態になっている。遺物は土師質土器1片と石臼1点が出土している。

Pit (図版2~6)

1区では34基、2区では69基、3区では5基、合計108基のPitが検出された。この内、覆土の堆積状況・形状等から柱穴と思われるものは、1区で25基、2区で33基、合計58基に及ぶ。しかしながら、調査区域が極めて狭小なため、住居跡等を検出することはできなかった。

これらのPitを概観してみると、大きな特徴として3つ上げることができる。1つめはサイズに関してである。上段1区のPitは平均して径30cm程になるが、上段2区・3区のPitは平均して20cm程の小さめのPitがほとんどである。2つめは新旧に関してであるが、上段2区のPitの方が出土遺物からみて、上段1区のPitより古いことがわかる。3つめは構造に関してである。柱穴と思われるPitを観察すると、底部に栗石を詰め、根固めしている物と、そうでない物とに分けることができる。

①1区のPit (図版2・3) Pit 2は北端部に位置し、径75cm、深度70cmを測る。覆土は黒色土に黄褐色土が混入する一層のみである。遺物として近世陶磁器6片が出土している。Pit 4はSD 3とSD 6の中間に位置する。径43cm、深度49cmを測り、覆土は一層で、暗茶褐色土に黄褐色土が少量混入している。Pit 8は中央部に位置し、SD 1を切る。径、深度とも60cmを測る。覆土は3つに分けられる。1、2層は暗茶褐色土であるが、1層には炭化物が、2層には黄褐色土が混入している。3層は暗黄褐色土である。Pit 9は中央部東端に位置する。径60cm、深度35cmを測る。覆土は2層となり、1層は暗褐色土、2層は暗茶褐色土に黄褐色土が混入している。Pit 17はほぼ中央部に位置し、径・深度ともに50cmを測る。覆土は暗茶褐色土である。Pit 20は中央部東端に位置し、SD 6を切る。径70cm、深度30cmを測る。覆土は黒褐色土である。近世陶磁器が1片出土している。Pit 28は南部の東端、SD 5の内部に位置する。径60cm、深度30cmを測り、底部は西から東にかけてなだらかに上がっていき、2段構造になっている。覆土は三層に分類でき、1層は黒褐色土に黄褐色土粒子が少量混入し、2層は茶褐色土、3層は黄褐色土に黒褐色土が少量混入している。

②2区のPit (図版4・5・17) Pit 40は南端に位置する。径73cm、深度43cmを測る。覆土は3つに分けられ、1層は黒褐色土、2層は茶褐色土でそれぞれ黄褐色土が混入している。3層はしまりのよい黒色土である。Pit 68は中央部西端に位置する。径40cm、深度37cmを測る。覆土は二層に分けられ、1層は黒褐色土で炭化物を含み、2層は暗黄褐色土に黒褐色土が細かく混入している。なお、2層からは土師質土器が5片出土している。Pit 69は中央部西端に位置する。径35cm、深度33cmを測る。覆土は二層に分けられるが、暗褐色土を主体にしており、下層になるほど黄褐色土の混入量が多くなる。Pit 76は南部の中央に位置する。径36cm、深度35cmを測る。覆土は三層に分けられ、1層は暗黄褐色土、2層は黒褐色土、3層は黄褐色土でいずれもしまり具合は悪い。Pit 84は中央部の西端に位置し、径30cm、深度54cmを測る。覆土は一層のみであり、暗褐色土に黄褐色土が混入している。Pit 47は南部に位置し、径40cm、深度

35cmを測る。覆土は二層に分けられ、黒褐色土を主体とする。Pit60は中央部に位置し、径40cm、深度34cmを測る。覆土は二層で、1層は黒褐色土で炭化物を含み、黄褐色土もわずかに混入する。2層は淡黄茶褐色土で火山灰が混入している。

③3区のPit (図版6) Pit38は東端に位置し、径38cm、深度34cmを測る。覆土は3つに分けられる。1、2層は茶褐色土であるが、1層には黄褐色土が混入している。3層は暗茶褐色土である。Pit39はPit38の東側60cm程離れた壁際に位置している。径38cm、深度20cmを測る。覆土は2つに分けられ、1層は黄褐色土で、暗茶褐色土が混入している。2層は暗茶褐色土で黄褐色土がわずかに混入している。2つの層ともしまり具合はよい。なお、Pit38・Pit39とともに遺物は出土していない。

④柱穴列 (図版4) 2区で二列確認された。1つは、Pit82・Pit66・Pit61・Pit89の柱穴が約1.8mの等間隔で並んでいるものである。柱穴の平均の大きさは、径35cm、深度25cmであった。もう1つはPit76・Pit55・Pit43の根固めされた柱穴が、約1.8mの等間隔で並んでいるもので、平均の大きさは径40cm、深度37cmとなる。この2つの柱穴列は調査区域が極めて狭小なことから、関連遺構を検出することはできなかった。しかし、調査区域東側にはその存在の可能性が高いものと思われる。

その他の遺構 (図版2・4～6・19)

①SK1 (図版2) 1区の南部東端に位置する。遺構の一部は、調査区外に延びるため、平面プランは確認できなかったが、径150cm、深度15cm程の土坑になると思われる。覆土は暗褐色土に細かい炭化物と黄褐色土粒子が混入している。

②SK2 (図版4・5) 2区の中央部東端に位置する。この土坑もSK1同様遺構の一部が調査区外に延びるため、平面プランを確認することはできなかったが、径140cm程の土坑になるものと考えられる。深度20cmを測り、底部は南から北にかけて徐々にレベル値が高くなる。覆土は暗褐色土で、少量の黄褐色土が混入している。なお、地山直上に厚さ3cm程の火山灰が検出された。

③SX1 (図版6・19) 3区の南端に位置する。覆土の掘削中は北西から南東に延びる、幅2～3m、深度35～45cm程の溝と判断したが、完掘後に西端がU型に収束していることが判明した。また底部のレベルも中央部分が一番低くなっていることから、溜池のような施設ではないかと推測した。本遺構は北側上端ラインの中央部から底部にかけて、径1m、深度1mの現代井戸に擾乱されており、その擾乱部分も含め、遺構全体にわたり多数の礫が投棄されていた。覆土は三層に分けられ、1層はしまりのよい暗茶褐色土で、酸化した粒子と黒色土を含む。2層も暗茶褐色土であるが、黄褐色土、炭化物、酸化した粒子が混入している。3層は黒褐色土で炭化物が混じり、廃棄時に投棄されたと思われる礫が多く含まれる。遺物は18世紀後半から19世紀にかけての近世陶磁器を中心に、破片ではあるが多數出土している。

第V章 出 土 遺 物

遺物は平箱（34×54.5×19cm）に5箱の出土があった。近世・近代の遺物が多く、特に陶磁器は18世紀以降のものが圧倒的である。ついで、中世・平安時代の遺物が多く、ほかに縄文土器が1点出土している。

土器・陶磁器（図版10～13・25～27）

縄文土器（1） ただ1点、4区から出土した。擾乱からの出土である。深鉢の胴部で、縄文はL R、焼成は良好である。纖維は含まれていない。縄文時代前期のものと考えられる。

須恵器（2～5） ほとんどが破片資料である。2・3は壺の胴部で外面は平行のタタキ、3の内面に同心円状の当て具痕が見られる。4の凸帶付四耳壺は外面は丁寧なロクロナデ調整が施されている。須恵器は全体的に薄く、焼成が良好で、堅緻な焼き上がりである。長野県境という地理的な要因もあり、信州的なものが多いが、明確な生産地は不明である。4の凸帶付四耳壺も信州に多い器種である。

土師器（6～9） 6は長頸壺の胴部である。内外面ともに丁寧なロクロナデ調整である。8の有台杯は造り出し高台、9はロクロ成形の高台で、底面は回転糸切りである。底部の調整は不良で粘土紐痕が残っている。土師器の焼成は良好である。7から9は古代末期から中世初頭にかけてのもので、出土はいずれも町主体の第一次調査のトレンチからである。

青磁（10～14） 青磁は5点出土している。12は口縁部の内湾する小碗である。丸彫りの蓮弁文が外面に施され、15世紀頃、10・11は碗で外面にヘラ先による細線蓮弁文が施されることから、16世紀頃のものと考えられる。13は皿、14は碗の高台部分である。高台の外底部は無釉で茶褐色を呈している。

珠洲焼（15～29） 珠洲焼は陶磁器について数が多かったが、胴部破片がほとんどで、口縁部を欠き、時期が明確にわかるものは少ない。15は壺の口縁部で「く」の字状を呈する。吉岡編年ではⅡ・Ⅲ期にあたり、13世紀代と考えられる。28・29は片口鉢で口縁部を欠いているが、櫛目の特徴から吉岡編年のIV期14世紀代と考えられる〔吉岡1989〕。ほかはすべて壺か甕の胴部破片で外面は平行のタタキ目が施されている。27は壺T種の底部付近である。底部のタタキ目と無文部との境にあたる。21の内面には円形の当て具痕が明瞭に残っている。24には内面にハケ状工具によるナデが見られる。

越前焼（30） 摺鉢である。外面はヨコナデで調整が荒くでこぼこしている。色調は淡茶褐色、内面の櫛目は1単位9条で幅2.9cmである。内面は磨滅してなめらかである。

中世土師質土器 (31~33) 31は「京都系」の土師質土器である。てづくねで口縁端部がつまみだされ、外面には指頭痕が残っている。胎土は精良で焼成も良好である。内外面の口縁部にはススの付着が見られる。32はロクロ成形の底部回転糸切りである。33はロクロ成形の底部回転ヘラ削りである。内面に炭化物とススが付着している。31は15世紀末から16世紀前半にかけてのものと考えられる。

肥前系陶磁器ほか (34~53) 34は唐津系陶器の碗である。高台は無釉で、高台に砂目痕が残っている。35は肥前系の陶器で京焼風によく見られる樓閣山水文が外面に描かれているが、高台見込にも釉がかかり、刻印はない。36の碗は割れ口の断面に焼き継ぎの痕跡が残っている。日用雑器に見られる焼き継ぎは18世紀後半から盛行する〔森本1990〕。37は染付の碗で内面見込みに手描きくずれの五弁花が描かれている。39にも内面見込みに五弁花が見られる。40は18世紀から現れる二重網目文である。41の碗の外面には「志きし満の やまと心越 人と王ば 朝日に尔保ふ 山さくら可那」という和歌が書き込まれている。42は広東碗、43は広東碗の蓋である。44も蓋で、外面には17世紀末から現れるこんにゃく判で施文されている。45から48までは皿である。49は唐津系の陶器で三島唐津と呼称される鉢である。鉄釉の上に刷毛様のもので柔らかく白化粧土を塗っている。内面は波形、外面は直線で文様が描かれる。外面底部付近は無釉である。

50から53は施釉陶磁器であるが、産地は不明である。地方窯の可能性があるが、周辺の窯跡の調査等は行われておらず、比定することはできない。18世紀後半以降のものであろう。

瀬戸・美濃系陶器 (54~59) 54は俗に言う「拳骨茶碗」で胴部には10ヶ所の側面からの押圧によるくぼみがある。ロクロ成形で削り出し高台である。内外面に黒褐色の鉄釉がかかり、鈍い光沢がある。高台見込みに釉がかかり、高台は無釉である。茶碗というよりも小鉢的用途に用いられたものである〔仲野1965〕。55は口径約12cmの灰釉の丸皿である。56は灰釉の丸皿で、使い込んだらしく磨滅が見られる。57は高台無釉の碗である。58は鉄釉のひだ小皿である。59は灰釉の三足付小香炉である。ロクロ成形の回転糸切りで、足は貼り付けである。

その他の陶磁器 (60~65) 60と61は擂鉢である。60はロクロ成形で付け高台である。底部の調整は不明である。黒褐色の薄い釉がかかり、鈍い光沢がある。内面には重ね焼きの痕跡が残り、底部には粗い砂が付着している。61は炻器で赤褐色を呈する。ロクロ成形で底部回転糸切りである。62は土師質火鉢でロクロ成形の底部静止糸切りである。胴部上半部と下半部に長径6.3cmの楕円形の窓が開いている。径2.2cm、高さ0.9cmの三足付きである。調整は外面に模様をつけた後、磨いているようである。還元炎焼成のため暗茶褐色を呈している。内面底部に重ね焼きの痕跡がある。63は土師質火鉢の可能性がある。ロクロ成形で、口縁部はよく研磨されている。胴部の模様は施文の後すり消す手法である。胴部に穿孔がある。64も土師質火鉢の底部である。ロクロ成形で底部回転糸切りである。磨きは見られない。65はロクロ成形の焙烙で

ある。熱のため赤褐色を呈している。

近世土師質土器（66～69） 66はロクロ成形の底部回転糸切りである。器壁が剥落している。67はロクロ成形の底部回転糸切りである。これも内面にススの付着が見られた。68はロクロ成形、底部回転糸切りで67とつくり・胎土・焼成がよく似ている。69はロクロ成形ではかのものより厚手のつくりになっている。口縁部にススが見られる。スス・炭化物の付着は灯明皿として使用された結果と思われる。

陶磁器の量比をみると肥前系の磁器が圧倒的である。ついで在地的な陶磁器が多く、次に瀬戸・美濃系の陶磁器・唐津系の陶器ということになる。唐津系は非常に少ない。これは18世紀後半以降の肥前系磁器の著しい増加という全国的な動きと同傾向を示している。また、この傾向を受けて、各地に磁器生産を試みる窯が増加し、地方窯の製品が出土するようになり、当遺跡でも多く見られる。

銭貨（第8図80～85）

銭貨は残存状態のよいものだけ図化した。

80は熙寧元宝（真）で北宋熙寧元（1068）年の初鋤である。81は磨滅しているが、第2字が宋（篆）と読めることから皇宋通宝（篆）の可能性がある。皇宋通宝は北宋元祐2（1089）年の初鋤である。82から85は寛永通宝である。82・83は寶の字の「貝」が「見」（見）と読み取ることができるため、寛永3（1621）年から寛文6（1668）年にかけて鋤造された所謂古寛永である。84・85は寶の字の「貝」は「貝」と読み取れるため、寛文8（1668）年から明治2（1869）年に鋤造された所謂新寛永である。出土地点は以下のとおりである。80・83は石垣裏込め、81は石垣中段の配石下、82は4区の耕土中、84は石垣上段、85は3区の裾混からそれぞれ出土している。



第8図 銭 貨 拓 影 (2 : 3)

石製品（図版12・13・27・28）

石製品としては砥石・石塔・茶臼・石臼があり、総計10点出土している。特に石臼は数が多く7点出土している。内訳は上臼が6点、下臼が1点である。しかし全て折損しており、完形品はない。

砥石 (70) 砂岩製の中砥で形態は舟形を呈し、3面に磨面を持ち、敵面が1面ある。また敵面と磨面が重複している面が2面ある。磨面には擦痕があり、その方向は右下がり・縦・横と各磨面によって異なる。なお、正面・正面・正面下部右側・正面下部左側・裏面はそれぞれ整形された面を持っている。

石塔 (71) 五輪塔の火輪部が検出されている。屋根形の勾配は緩やかであり、上面が浅く凹んでいる。下面の幅は24cm、上面の幅は11cm、高さ17cmを測る。安山岩製。

茶臼 (72) 安山岩製の下臼である。上面径18.5cm、底径27cm、高さ11.5cmを測る。ただし皿部が欠損しており、その大きさは不明である。摺目は6分画で、1区画に9~11本の細い溝が刻まれている。上面中央部には推定直径2cm程の心棒を差し込むほぞ穴がある。底面は緩く内湾している。

石臼 (73~79) 73は上臼で直径28cm、高さ14cmを測る。底面の摺目の溝は一区画5条までは確認できたが、磨滅が激しく、それ以上あるかどうかは不明である。安山岩製。74は砂岩製の上臼で、直径約32cm、高さ10cmを測る。上面の中央部には直徑3cm程のほぞ穴が下面まで貫通している。摺目は6分画であり、一区画には7条の溝が刻みこまれている。75は安山岩製の上臼である。直徑約30cm、高さ8cmを測る。下面の摺目は6分画で、1区画5条の溝が刻まれているものと思われる。76は推定直徑32cm、高さ16cmの上臼である。上面中心から外周までの中间点に、直徑3cm程の供給口が貫通している。供給口下半部は磨滅している。摺目は6分画で、1区画14条の溝が刻みこまれている。安山岩製。77は推定直徑41cm、高さ12cmを測る安山岩製の上臼である。上面の中心から外周までの中间部分に直徑4cm程の供給口があり、下面まで貫通している。摺目は残存部分が少ないため推測の域をでないが、8分画で1区画に12条程の溝が刻まれているものと思われる。78は推定直徑32cm、高さ8cmの安山岩製の上臼である。上面中央部に直徑2~3cm程のほぞ穴が貫通している。全体の10分の1しか残存していないため、摺目が何分画かは不明である。3条の溝が確認できるだけである。79は唯一の下臼である。推定直徑27cm、高さ14cmを測り、中央部には直徑2cm程の心棒を差し込むほぞ穴がある。摺目は上面の磨滅が著しく、何分画かは不明である。溝が6条確認されるのみである。安山岩製。

第VI章 まとめ

今回の発掘調査では関川関所跡と考えられる遺跡を調査した。関川関所に関しては文献史料や絵図面等が残っており、歴史的環境からもわかるように関所が次第に整備されていった様子がうかがえる。発掘調査の内容もこれを裏付ける結果となったといえよう。

石垣

石垣裏込め出土遺物は18世紀後半から19世紀にかけての遺物が多く、一部は明治維新後までくだるものも見られ、石垣自体はごく新しく、関所の廃絶後に築かれた様子がうかがえる。しかし、石垣の基礎部分（石垣中段部分）は出土数は少ないが18世紀後半までの遺物しか出土しておらず、古い様相を示している。関川関所は承応（1652～1654）年間に口留番所となり、元禄10（1697）年に幕府管下の関所となつたことがわかっているので、本格的に整備されたのは18世紀以降と考えてよいのではないだろうか。石垣もそれ以降に築かれている可能性がある。そして、江戸幕府の重要な関所の一つであったことを考えると、増・改築が行われたことは想像に難くなく、何度か繰り返されたものであろう。ただ、現在の石垣は明治に入って民間に払い下げてから築かれたと思われ、それほど大規模な工事を行ったとは考えられず、崩れた石垣を積み直すというような比較的簡易な工事だったのではないだろうか。しかし、造構各説の石垣（13ページ）でも述べたように調査対象範囲と張り出し部の石垣の面は積み方に相違が認められ、張り出し部の方が丁寧な積み方で崩れもないことからこの部分は明治年間に手が入っておらず、関所が機能していた時期のままの可能性もあることは指摘しておきたい。

関所の内郭

1・2・3区からは多数のPitと配石溝が検出されている。ほとんどのPitは柱穴と考えられる。ほぼ調査区全域から古代・中世・近世の時期の遺物が出土しているが、1・3区は包含層・造構から出土する遺物は近世（18世紀後半以降）のものが主体をなしており、2区と町主体第一次調査トレンチの包含層と造構からは、古代・中世・近世の遺物が検出されている。特に2区はⅢ層とⅣ層で古代と近世に分層できた。中には古代の遺物の出土する柱穴もあったが、柱穴を中心とする造構を時代ごとに判別することはできなかった。古代・近世の柱穴が混在しているようである。また、柱穴が規則的に並ぶかどうかも調査範囲が狭少なため、孤立柱建物跡として確認することはできなかった。

中世の遺物もかなり検出されているが、出土地点は町が主体で行った第一次調査トレンチと

石垣部分に集中している。遺物の量から考えると遺構も存在した可能性があるが、遺構から出土した中世遺物は全くない。遺物の内容は一般集落と差はないと思われるが、中世での遺跡の性格は不明である。

1区の配石溝と柱穴は出土遺物から言っても近世の建物跡と考えられる。18世紀後半にも掘立柱建物が存在したことは、近年調査の進んでいる江戸近郊の近世遺跡でも確認されている〔森1990〕。また、配石溝は建物と建物の間に存在した境溝に当たるのではないだろうか。この切り合い関係から見ると、複数回の立て替えが行われたことがわかる。ただ、残念なことに調査範囲の狭さから建物の全容を明らかにすることはできなかった。これらの遺構は関所に関係した建物が存在したこと示しているものと思われる。しかし、第3図・関所平面図のどの場所にあたり、どのような施設が存在したかを推測することはできない。

町主体で行われた宅地移転先の第一次調査でも、図版7に見られるような1条の溝と多数の柱穴が検出されており、関所に関する建物の存在した可能性がある。

出土した近世遺物は、一般集落と大差なく、関所に特別に関わる遺物の存在は感じられない。

今回の調査は関川関所跡の西側端部にあたると考えられる狭少な範囲しか調査することができず、全容の解明には程遠いものであるが、今後の関川関所跡の整備の彈みになれば幸いである。

引用・参考文献

- イ 井上喜久男 1986 「近世城館跡の陶磁ノート」(2)
『愛知県陶磁資料館 研究紀要』5 愛知県陶磁資料館
- ウ 上田 秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2
日本貿易陶磁研究会
- 内田 祐治 1986 「第2篇 鎌倉時代以降出土陶磁器の分類・出土陶磁器の様相」
『下宿内山』 東京都清瀬市下宿内山遺跡調査会
- 宇野 隆夫・前川 要はか 1993 『富山大学考古学研究報告第6号 珠洲大崩窯』 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会
- オ 大橋 康二 1984 『北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館
- 大橋 康二 1989 『肥前陶器』 考古学ライブラリー-55 ニューサイエンス社
- 大橋 康二 1992 『近世における肥前陶磁の流通』 国立歴史民俗博物館研究報告 第48集 国立歴史民俗博物館
- 小和田哲男 1979 『城と城下町』 教育社歴史新書 〈日本史〉97 教育社
- キ 北垣聰一郎 1981 『曹洞』『石垣』『日本城郭大系』別巻II 新人物往来社
- コ 小村 式 1976 『近世越後・佐渡史の研究』 地方史叢書7 名著出版
- サ 板井 秀弥・金沢 道篤 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第44集 新井市坪ノ内館跡』 上新バイパス関係遺跡発掘調査報告書II 新潟県教育委員会
- 板井 秀弥・金沢 道篤・田辺 早苗 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 三島郡出雲崎町番場遺跡』 国道116号埋蔵文化財調査報告書 新潟県教育委員会
- 板井 秀弥 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀II遺跡』 新潟県教育委員会
- 佐藤 雅一ほか 1986 『川久保遺跡』 温沢町教育委員会
- 佐藤 雅一ほか 1993 『松平守忠・松平忠重・松平忠定の居城跡』 特殊法人日本芸術文化振興会・東京都渋谷区初台遺跡調査団
- タ 高橋 昌也・國島 雅・鈴木 俊成 ほか 1989 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第54集 鶴口下追跡・美山遺跡』 新潟県教育委員会
- 田口 昭二 1983 『美濃焼』考古学ライブラリー-17 ニューサイエンス社
- 田中 耕作・鶴巻 康志 ほか 1990 『三光鉢跡・宝積寺鉢跡』 新発田市教育委員会
- 田辺 早苗 1992 『神林村埋蔵文化財調査報告第4号 牧目鉢跡』 新潟県神林村教育委員会
- ト 戸根与八郎ほか 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池・下新町・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 戸根与八郎 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第41集 高田城下鍋屋町遺跡』 新潟県教育委員会
- 仲野 泰裕 1985 『長野県出土の近世陶磁』『愛知県陶磁資料館研究紀要』4 愛知県陶磁資料館
- ニ 西ヶ谷恭弘 1993 『戦国の城・城下町』歴史群像DX④ 學習研究社
- ハ 早津 賢二 1990 『妙高山は噴火するか~妙高山の生い立ちを探る』 新潟日報社
- マ 丸山 実成 1986 『近世における越後の開所一口留番所との関係を中心として』『日本近世交通史論集』 吉川弘文館
- ミ 水澤 幸一 1993 『江上館跡I』 中条町教育委員会
- 美濃古窯研究会 1988 『美濃古窯研究会会報No.3 美濃の古窯』 美濃古窯研究会
- 妙高高原町史編集委員会 1986 『妙高高原町史』 新潟県妙高高原町
- ム 室岡 博・本間 信昭 1976 『兼保遺跡』 妙高高原町教育委員会
- 室岡 博 ほか 1989 『福田遺跡-発掘調査概報-』 新潟県吉川町教育委員会
- 室岡 博・戸根与八郎・小池 義人・大澤 正己 ほか 1990 『福田遺跡-第二次発掘調査概報-』 新潟県吉川町教育委員会

- 室岡 博・戸根与八郎・小池 義人・大澤 正己 ほか 1991 『桶田遺跡－第三次発掘調査概報－』 新潟県吉川町教育委員会
- モ 森 伸一 1990 「江戸近郊の出土陶磁器」『江戸の陶磁器』 江戸遺跡研究会第三回大会・資料編 江戸遺跡研究会
- 森本伊知郎 1990 「燒窯ぎに関する一考察」『江戸の陶磁器』 江戸遺跡研究会第三回大会・資料編 江戸遺跡研究会
- ヤ 山本 幸俊・久保田好郎 1991 『新潟県歴史の道調査報告書 第二集 北国街道Ⅰ』 新潟県教育委員会
- ヨ 吉岡 康暢 1989 「総論 珠洲古陶」 『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館
- ワ 渡辺 和敏 1984 「近世開所の地方的展開」『文学論叢』74輯 愛知大学文学部
- 渡辺ますみ 1991 『亀田町文化財調査報告書第3集 荒木前遺跡』 新潟県亀田町教育委員会

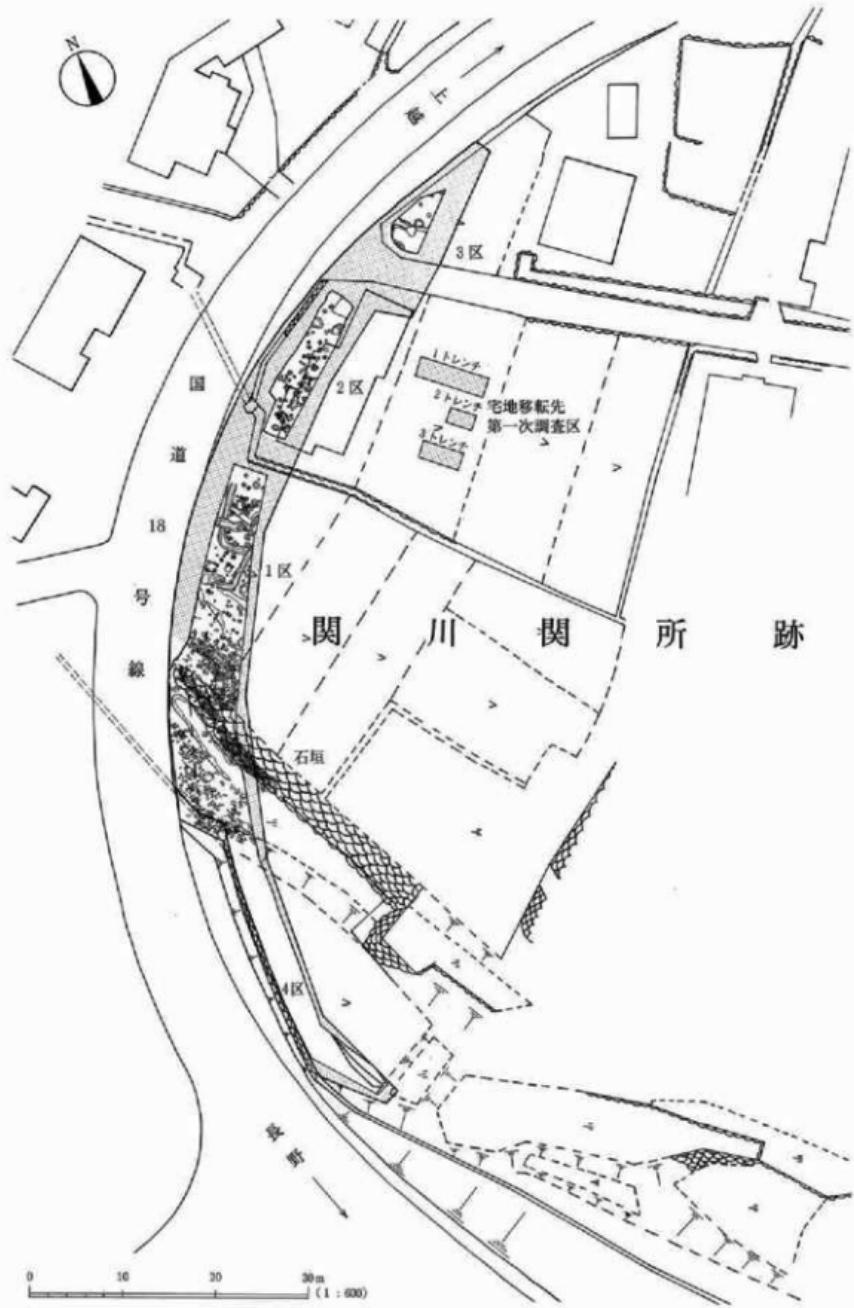
別表1 土器・陶磁器觀察表

番号	地 点	種 別	器 種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	胎 土	色 調	成形・調整	備 考
1	4区 標品	高 火 土 器	厚 壁 盆				灰 褐 色	褐色・表面ヌメ	圓文捺文 L.R.	焼成良好
2	石器中段 No.3 3層	須 恵 器	壺				石 英 灰 色 黑色小粒子	灰色	外面平行タタキ 内面ナメ	
3	3区 No.105 黑層	須 恵 器	壺				長 石 灰 色 黑色小粒子	暗 灰 色	外面平行タタキ 内面同心円内て具面	
4	石器上段配石 内 No.42	須 恵 器	凸部付 耳壺				黑色小粒子	灰 褐 色	ロクロナメ	焼成良好
5	石器裏込	須 恵 器	壺	23.0			石 英 青 黑色小粒子	青 灰 色	ロクロナメ	焼成良好
6	Fm88	土 器	壺				灰 石 石 英	灰 褐 色	ロクロナメ	焼成良好
7	町1次1トレ II・Ⅲ層	土器質土器	杯	42	残存高 11		長 石 灰 色 黑色小粒子	鐵 色	ロクロ 底面削除余切	
8	町1次1トレ Ⅲ層	土器質土器	有台杯	40	残存高 23		長 石 赤 色 黑色小粒子	鐵 色	ロクロ つくり出し高台	
9	町1次1トレ I・Ⅱ層	土器質土器	高 台				長 石 石 英	鐵 色	ロクロ 底面削除余切	
10	石器上段配石 内	青 器	碗				青 灰 色 黑色 で な い	暗 灰 色	内外面凹入	ヘラ先による 細胞蓮弁文
11	石器裏込	青 器	碗	测定 3.5	残存高 3.2		灰 白 色	灰 綠 色	内外面凹入	ヘラ先による 細胞蓮弁文
12	石器中段 2層	青 器	小 碗	测定 8.4	残存高 2.6		灰 白 色	灰 綠 色		蓮弁文(丸印)
13	町1次1トレ I・Ⅱ層	青 器	皿	测定 16.0			灰 白 色	灰 綠 色		蓮弁文
14	石器中段配石 内	青 器	碗 (高台部分)	5.0	残存高 2.5		灰 色	灰 綠 色	凹入あり	
15	石器裏込	灰 器	碗				白色 粒子 金 雲母	青 灰 色	外面ナメタタキ(平行条線) 内面ナメ	口縁部が「く」字状を呈する
16	石器内	灰 器	碗				白色 粒子 小 礁	青 灰 色	外面タタキ(平行条線) 内面ナメ	
17	1区 No.12 1層	灰 器	碗				白色 粒子 海 緋 骨 針	青 灰 色	外面タタキ(平行条線) 内面ナメ	
18	石器裏込	灰 器	皿か盤				白色 粒子 小 礁	青 灰 色	外面タタキ(平行条線)	
19	石器内	灰 器	皿か盤				白色 粒子 雲母 微小礁	青 灰 色	外面タタキ(平行条線) 内面ナメ	
20	石器裏込	灰 器	皿か盤				白色 粒子 雲 母	青 灰 色	外面タタキ(平行条線) 内面ナメ	
21	石器内	灰 器	碗				白色 粒子 雲 母	青 灰 色	外面タタキ(平行条線) 内面凹入て具面	
22	石器上段配石 下 2層	灰 器	碗				白色 粒子 雲母 海綿骨針	青 灰 色	外面タタキ(平行条線) 内面ナメ	
23	石器上段配石 下 2層	灰 器	碗				白色 粒子 雲 母	青 灰 色	外面タタキ(平行条線) 内面ナメ	
24	石器内	灰 器	碗				石 英 白色 粒子	青 灰 色	外面タタキ(平行条線) 内面ハケ状工具によるナメ	

番号	地 点	器 形	器 种	口径 cm	底径 cm	高さ cm	胎 土	色 调	成 形・装 飾	備 考
25	町1次1トレ I・II層	浅 腹 壺	壺				石英 黑色粒子 気泡 痕あり	暗 灰 色	外面タコ足(平行条線) 内面施錆	
26	町1次1トレ I・II層	浅 腹 壺	壺				石英 黑 白色 粒子	灰 灰 色	外面タコ足(平行条線) 内面ナメ	
27	表 横	浅 腹 壺	壺				白色 粒子	灰 灰 色	外面上半部分タコ足 内面ナメ	
28	町1次2トレ I・II層	浅 腹 壺	壺				石英 黑 白色 粒子	灰 灰 色	ロコナメ 横錆目1单位 13条 1單位2.6cm	
29	石垣上設配石 内	浅 腹 壺	壺				白色 粒子 気泡 痕あり	暗 灰 色	ロコナメ 横錆目1単位 12条 1單位2.7cm	
30	石垣内	浅 腹 壺	壺	16.3	残存高 5.1		残存高 灰 黑 灰 色	淡 灰 暗 色	ナメ 内面横錆目1単位9条 1單位2.9cm	内面施錆
31	石垣中設配石 下 9層	土師質土器	壺	断定 10.8	残存高 2.5		残存高 灰	色	手づくねナメ	京都系 口縁部内面にスヌ
32	2区 包含層中	土師質土器	壺		断定 4.6		残 灰	褐 色	ロクロ 回転系切	
33	石垣中設配石 下 9層	板 地 系 土師質土器	壺 明鏡	6.5	4.6	1.65			ロクロ 透明軸輪ヘラ削り	内面に炭化物。スヌ付
34	町1次2トレ I・II層	浅 腹 壺	壺		4.5	残存高 2.3	灰 暗 灰 色 質入細かい	ロクロ	高台に巻口痕あり 高台無地 II式代か	
35	3区 S X 1	肥 前 系 壺	壺	10.8	4.8	7.5	残存高 灰	色	ロクロ 横錆山水文 高台丸 込にも輪がかり刻印なし 16段手	京熱系 横錆山水文 高台丸 込込五片花(手がきくずれ) 16段手
36	石垣裏込	肥 前 系 壺	壺		4.4	残存高 4.3	白	透青白色 透明・染付	透青させ 透明手	
37	3区	肥 前 系 壺	壺	8.5	3.4	5.15	白	透青白色 透明・染付	ロクロ 輪にムラあり	見出五片花(手がきくずれ) 16段手
38	石垣中設 1層	肥 前 系 壺	壺	10.7	残存高 4.5		白	透青白色 透明・染付	ロクロ	
39	3区 S X 1 to 6	肥 前 系 壺	壺		3.5	残存高 2.5	白	透青白色 透明・染付	ロクロ	見出五片花
40	石垣裏込	肥 前 系 壺	壺	11.5	残存高 5.0		乳 白 色 象	ロクロ	16段手	
41	石垣裏込	肥 前 系 壺	壺	12.8	4.6	5.85	白	透 明 染 付	ロクロ	
42	1929 肥 前 系 壺	広 東 瓶 (灰 壺)	壺	6.0	残存高 3.85		灰 白 色 透明	物	ロクロ 内外面とも調査は丁寧	16段手~18
43	石垣裏込	肥 前 系 壺	壺	10.8	5.8	5.9	灰 白 色 透明	物 付	ロクロ 内外面とも調査は丁寧	16段手
44	3区 S X 1	肥 前 系 壺	壺		2.1		白	透 明 染 付	ロクロ	こんなに早く判 16段手 外型の模様は幾?
45	石垣上設配石 中 頂54	肥 前 系 壺	壺		9.7	残存高 1.35	白	透 明 染 付	ロクロ	
46	石垣中設 5層 No.13	肥 前 系 壺	壺				白	透 明 染 付	ロクロ	
47	石垣中設 6層 No.16	肥 前 系 壺	壺				白	透 明 染 付		

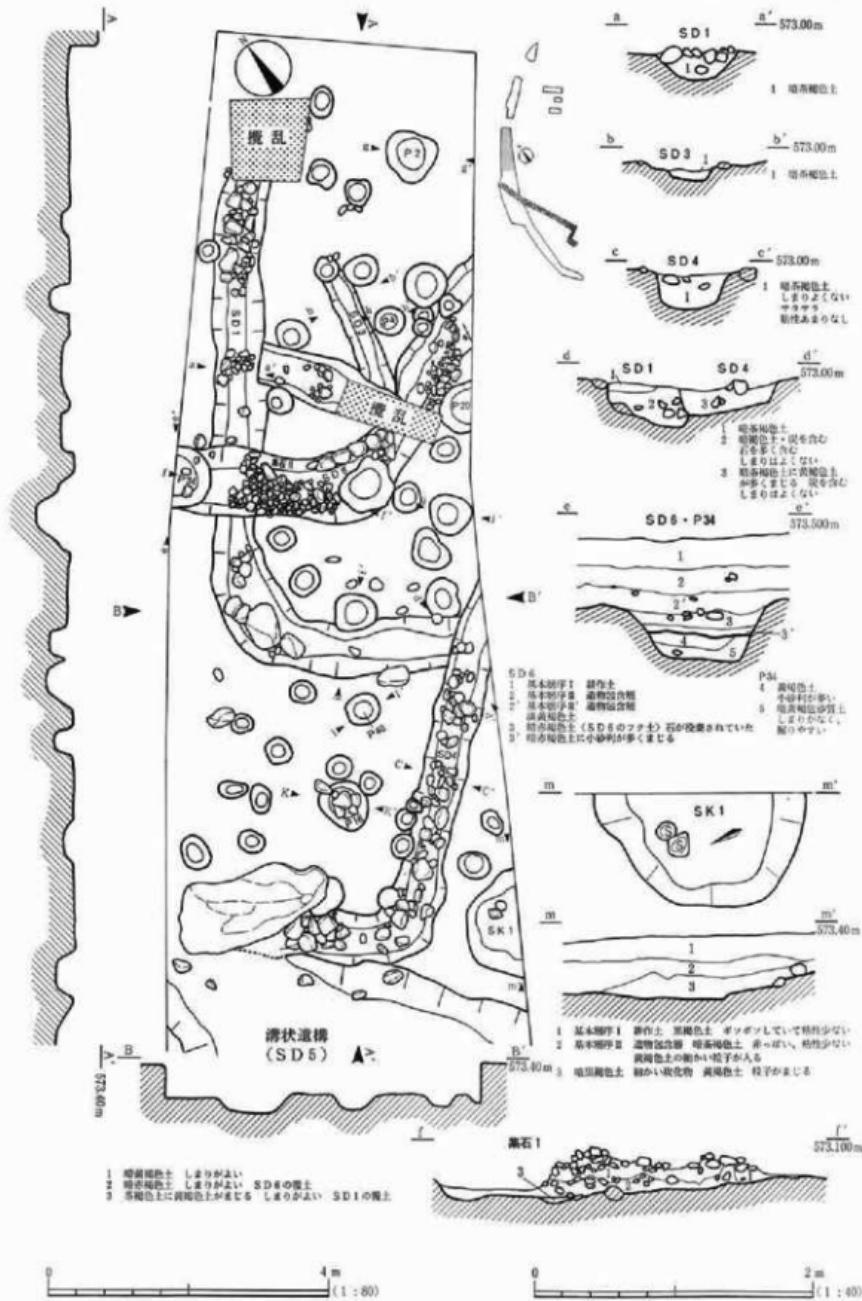
番号	地 点	種 別	器 器	口径 cm	底径 cm	高さ cm	胎 土	色 色	成 形 - 調 整	備 考	
48 S XII	東 京 系 都 都	盆					白 灰 色	透 制 陶 付 灰 入		内面粘付陶文 1b後半	
49	石垣裏込	南 津 系 都 都	盆	19.7		我存高 3.1	暗 反 色	鐵 色	輪	ロクロ	高台の上に白化施土を焼て いる 1b
50	石垣裏込	產 地 不 明 都 都	盆	18.6	7.8	9.8	暗 灰 色	鐵 色	輪	ロクロ	地方窓か
51	石垣裏込中	產 地 不 明 都 都	盆			我存高 11.1	灰 白 色	内外 褐 色	ロクロ 内面のくらうびきの跡はそのまま外面にもわずかに 残る		
52	石垣裏込	產 地 不 明 都 都	半 製 盆	22.8		我存高 6.65	板 灰 褐 色	緑 白 色	輪	ロクロ 内外面の調整は丁寧	地方窓か
53	石垣裏込	產 地 不 明 都 都	盆			我存高 7.3	灰 色	赤 灰 褐 色	ロクロ		地方窓か
54 S XII	瀬戸・美濃系 都 都	骨舟系	10.8	5.25	8.1	透白色小メハ 細かくない	内外透明白地 褐色光沢あり		ロクロ 刷り出し高台 外面	高台見込みに難 高台は粗粒 には、ロクロびきの跡がその まま残る 内面の調整は丁寧	
55 I区 No.22 裏面	瀬戸・美濃系 灰 物 施 差 加丸足	皿 (使田) 懸定				我存高 2.5	灰 白 色	灰 黄白色 (灰施)			
56	I区 包合輪中	瀬戸・美濃系 灰 物 施 差	丸皿	10.0	5.6	2.85	灰 黄 色	灰黄绿色 (灰施)	ロクロ 外面にロクロびきの 段が残る 内面の調整は丁寧	外面部高台部分に密度がみら れる 1b後半	
57	石垣裏込	瀬戸・美濃系 灰 物 施 差	碗			我存高 3.2	灰 白 色	灰黄绿色 (灰施)	ロクロ	高台粗粒	
58	河1次)トレ I・II層	瀬戸・美濃系 灰 物 施 差	ひだ小皿	10.5		我存高 3.3	暗 灰 黄 色	鐵 輪			
59	石垣上段配石 内 容 No.6	瀬戸・美濃系 灰 物 施 差 三 足	香炉(小)	5.2	3.5	3.1	板 色	灰 黄綠色 (灰施) 抵入	ロクロ 灰透明白地 三足點付	内面口縁部まで施釉	
60 S XII	產 地 不 明	盤 盆		13.2		我存高 5.65	暗 灰 黄 色	黑褐色點 う すい光沢あり	ロクロ 付け高台 内面輪目	内面に黒ねじ跡 高台には 砂が付着	
61	2区 粘土中	產 地 不 明 場	棒 盆			我存高 3.05	赤 灰 色	赤 灰 色	ロクロ 灰透明白地 内面輪目	1b	
62	石垣裏込	產 地 不 明 土師質陶器	火 筋			我存高 17.3	我存高 33.1	暗 灰 色	暗 灰 色 (還元炎焼成)	ロクロ 脱脂静止点切 外面 に接觸をつけた後焼いている 底部内面に深23cm・高さ9 mmの穴	
63	石垣裏込	產 地 不 明 土師質陶器	火 筋			我存高 5.7	灰 白 色	墨 灰 色 (還元炎焼成)	ロクロ 口縁部強く研磨され ている 脱脂接觸は施文の後 すり落し	洞部内面は穿孔する穴1つと両側 に途中までの穴まつ	
64	石垣内	產 地 不 明 土師質陶器	火 筋			我存高 24.6	我存高 2.45	暗 灰 色	暗 灰 色	ロクロ 灰透明白地 還元炎焼成 焼きなし	
65 I区 腰丸	產 地 不 明 土師質土器	燒 烧	推定			我存高 3.8	暗 色	鐵 色	ロクロ		
66	石垣中段5号 No.2, 7, 9 接合	土師質土器	盤	9.8	5.8	2.7	暗 色	鐵 色	ロクロ 回転点切	底部に炭化物 外表面化粧しい	
67	I区 包合輪中	在 地 系 土師質土器	盤		7.4		暗 色	鐵 色	ロクロ	内面にスス付着 例と並り。 施土・焼成が近似	
68	石垣裏込	在 地 系 土師質陶器	盤		7.4		暗 色	鐵 色	ロクロ 灰透明白地		
69	石垣上段配石 内 容 No.53	土師質土器 (灰施地)	盤	8.9		我存高 2.2	暗 色	鐵 色	ロクロ	口縁部にスス付着	

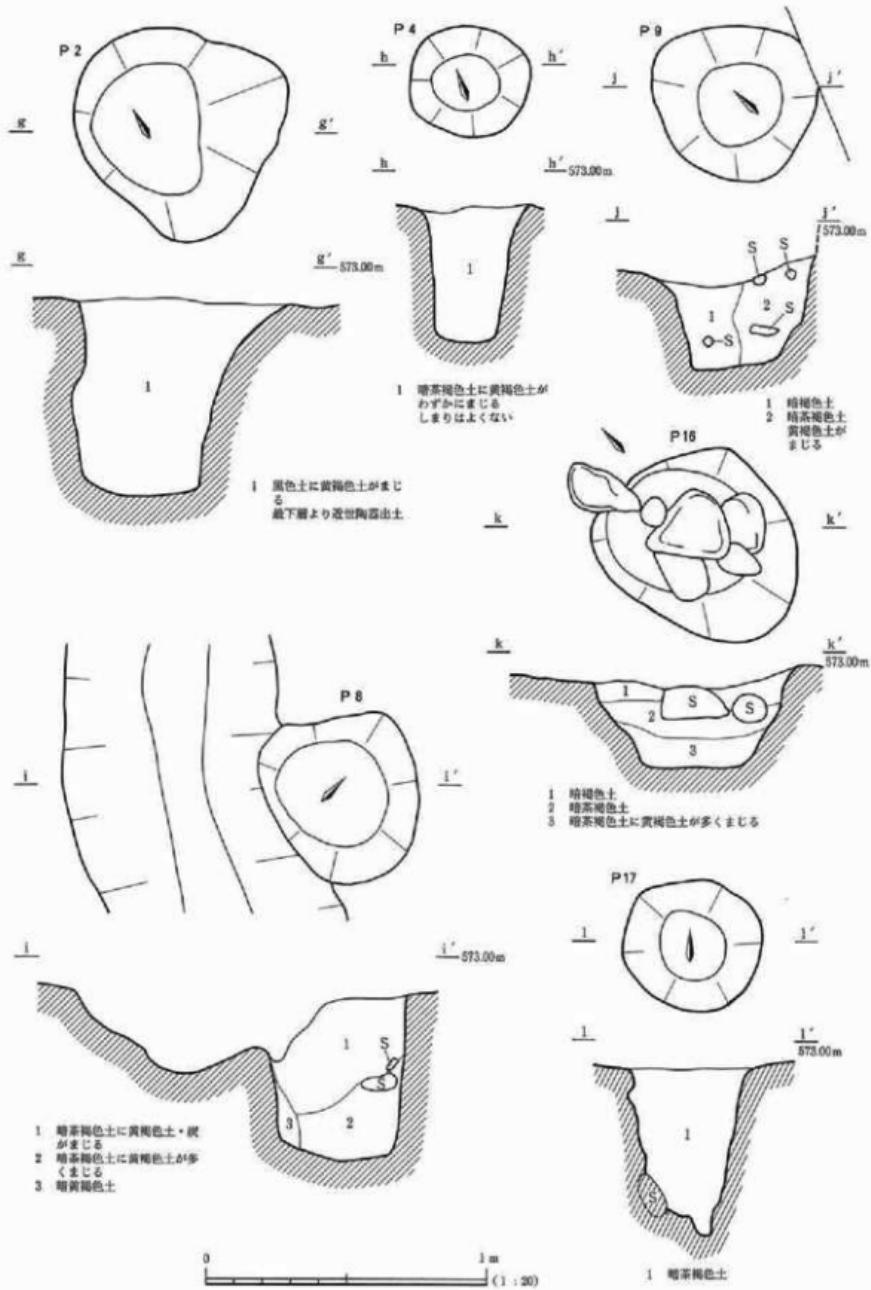
図 版

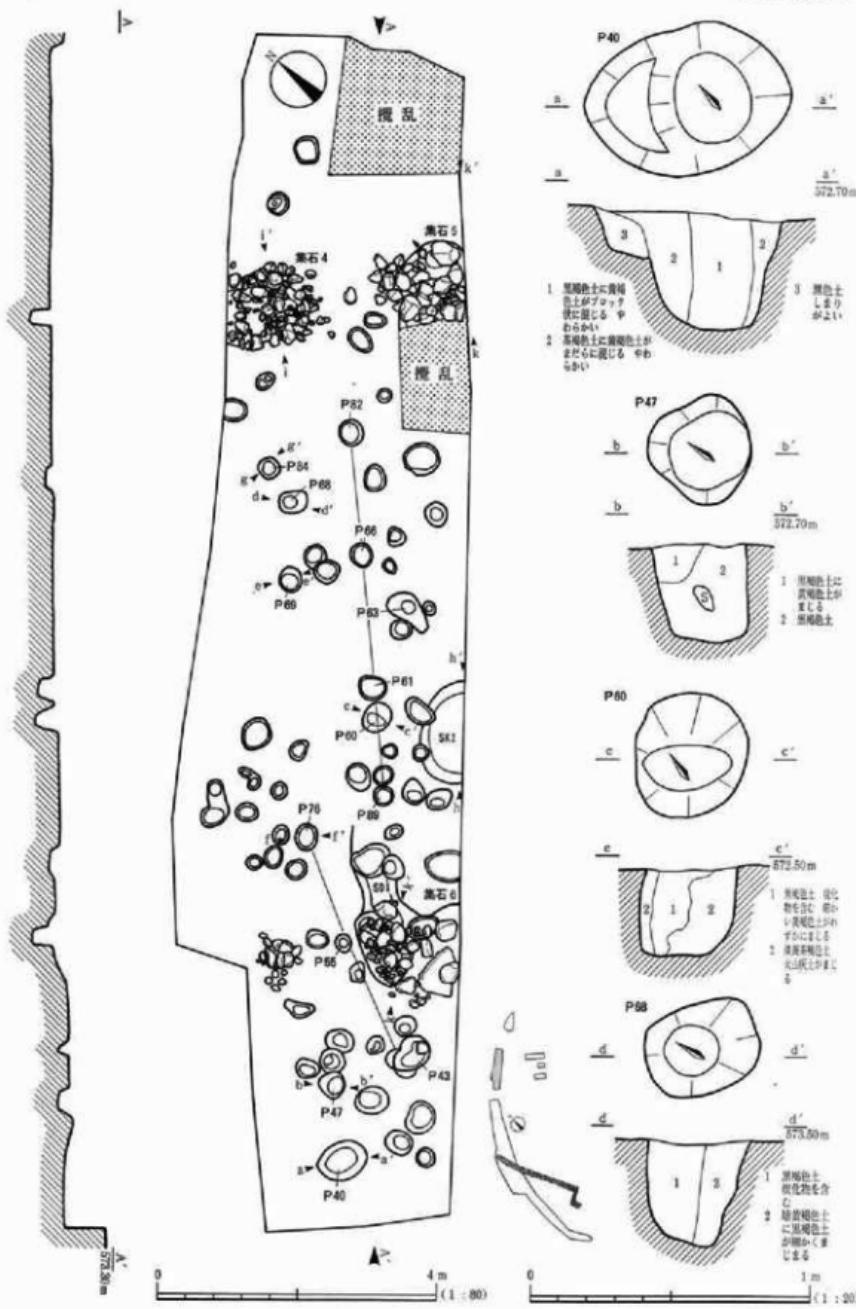


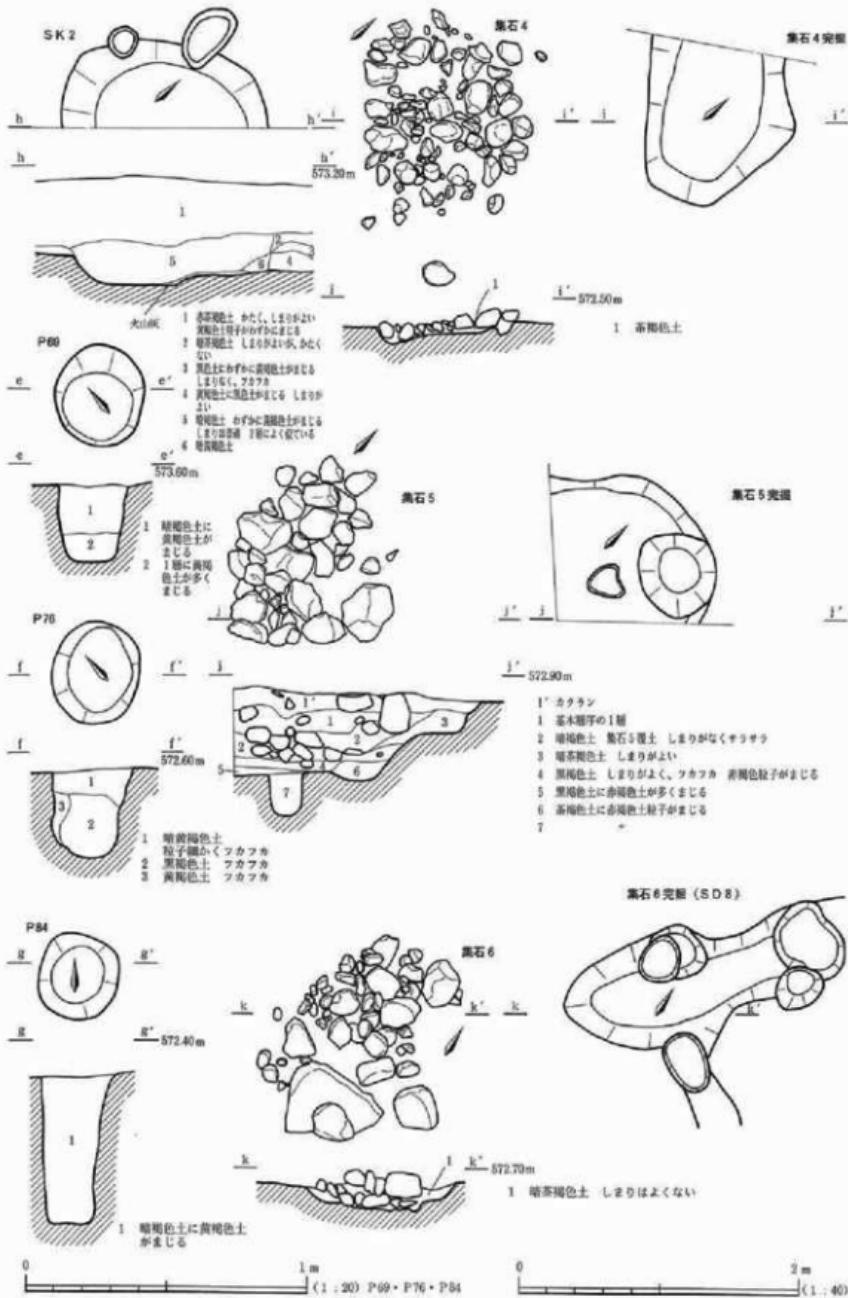
圖版 2

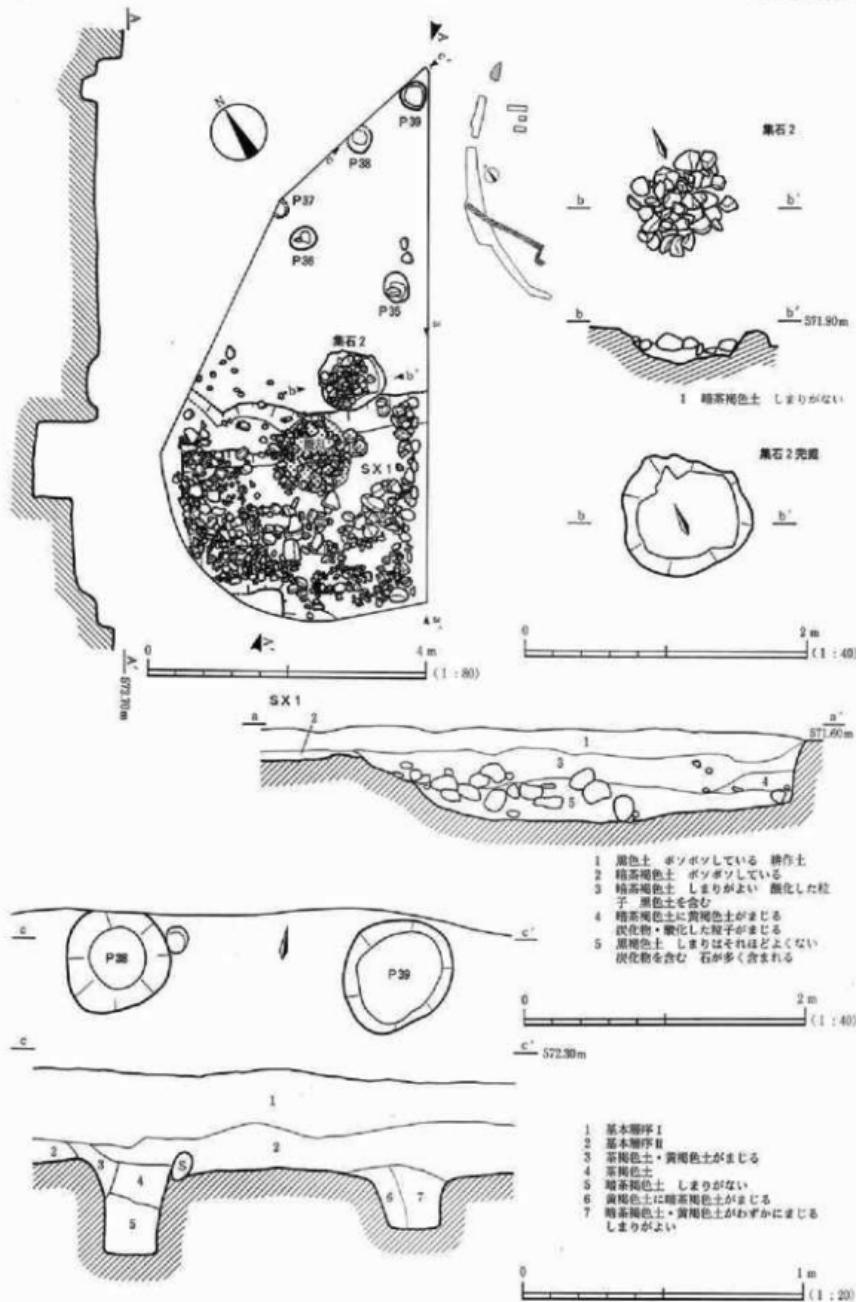
1区遺構実測図 1

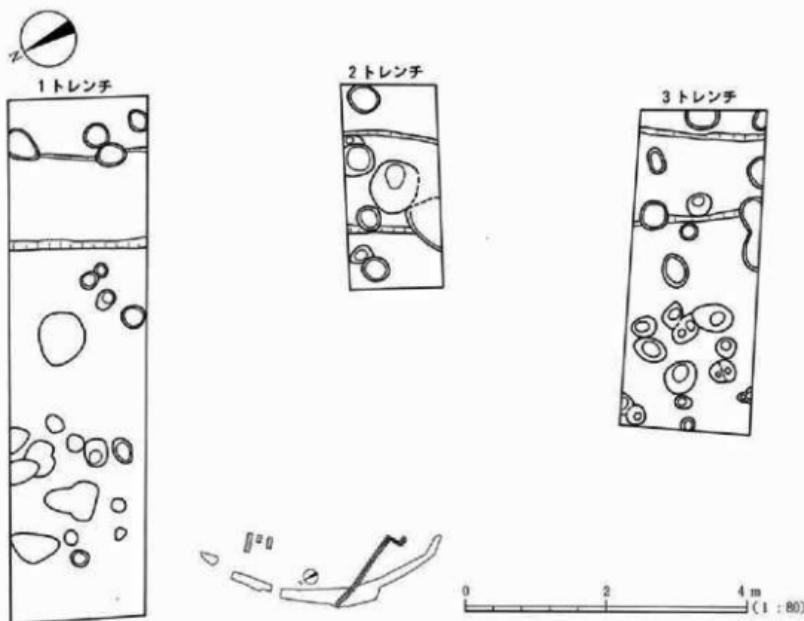






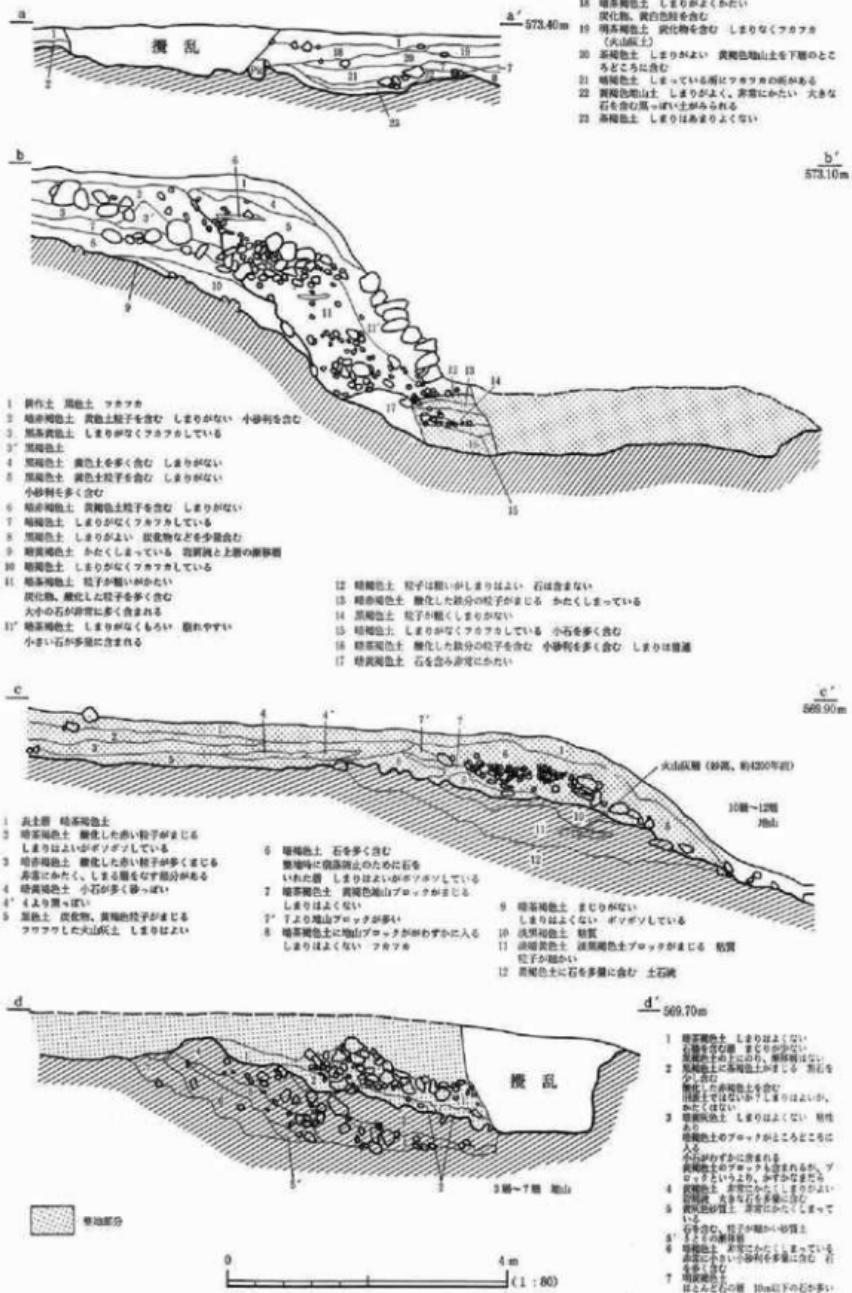


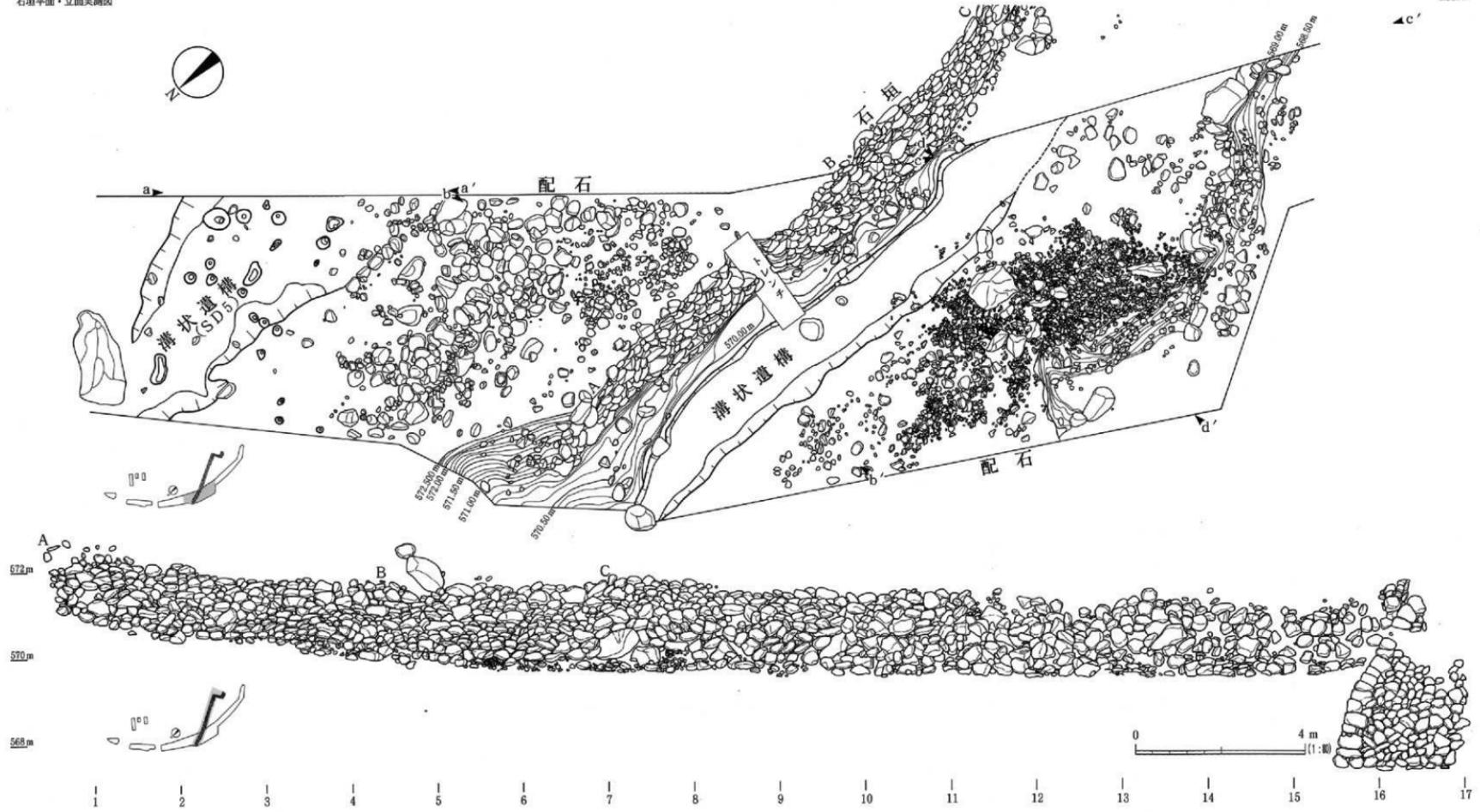


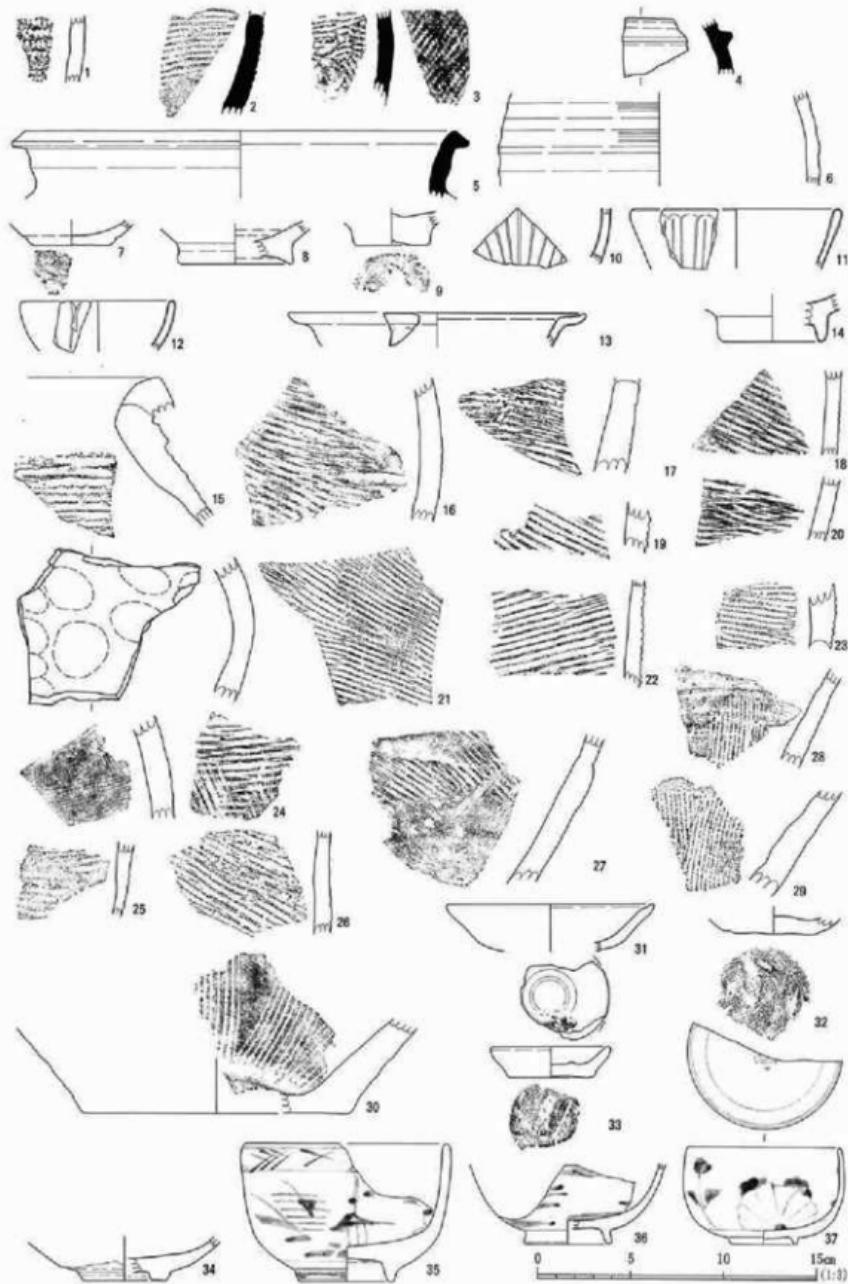


圖版 8

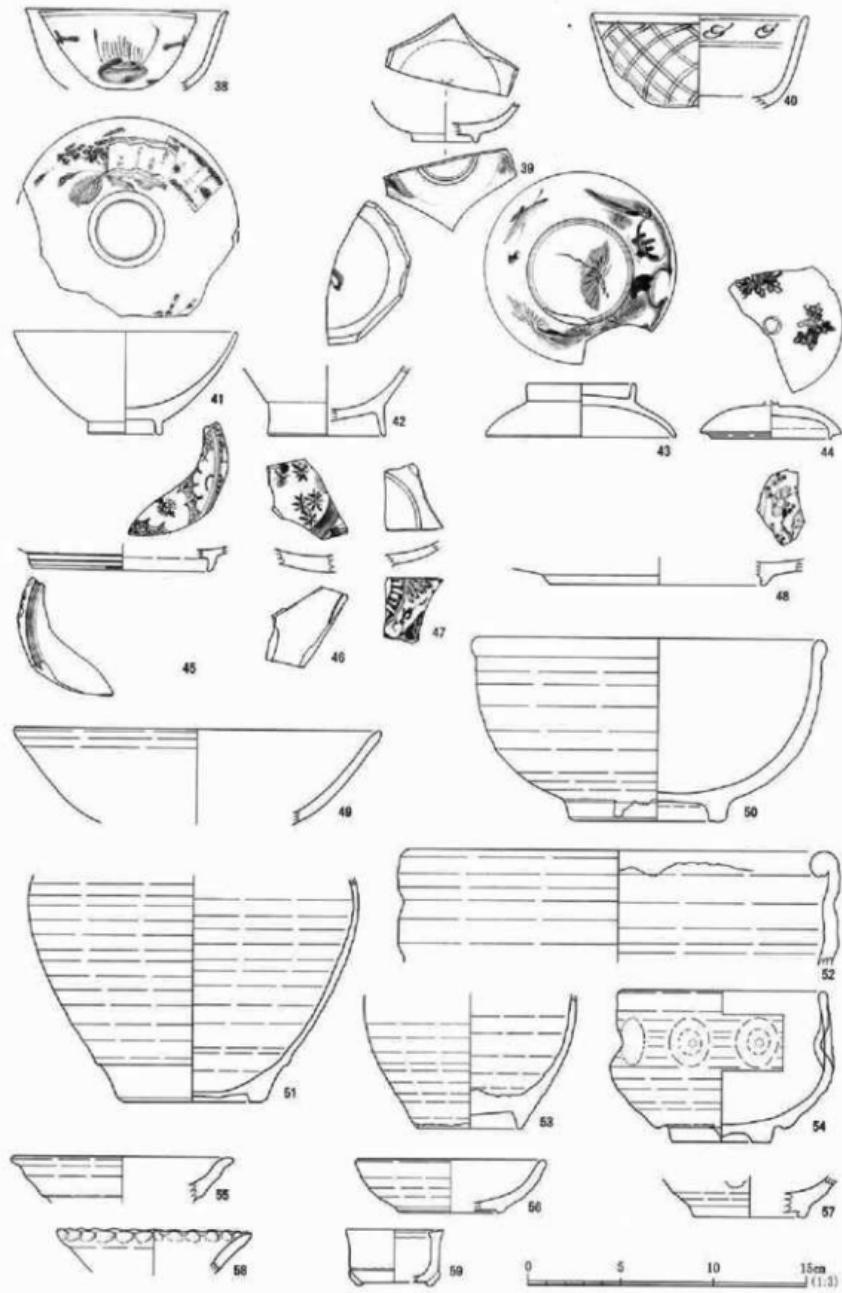
石壠斷而突側圖



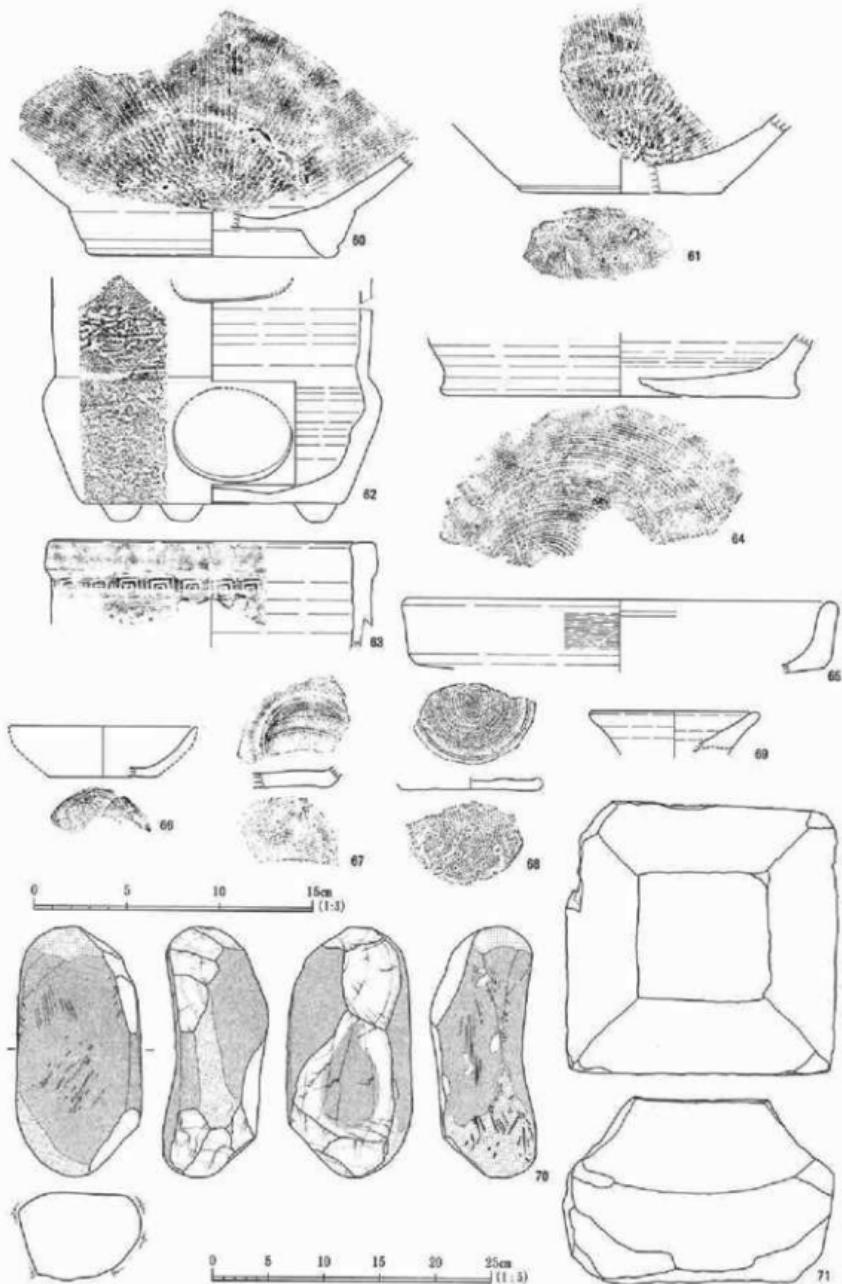




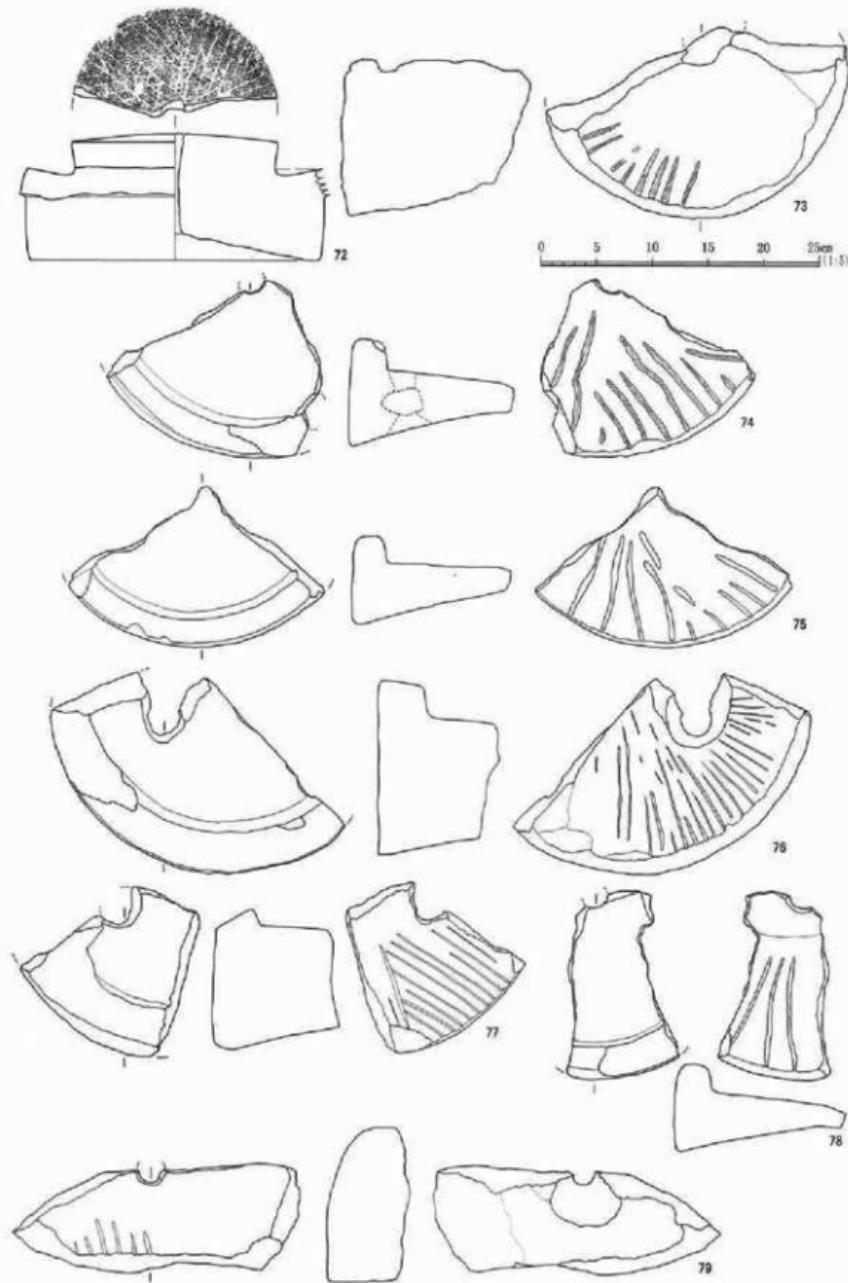
縄文土器 (1) 須恵器 (2~5) 土師器 (6~9) 青磁 (10~14) 珠洲焼 (15~29) 越前焼 (30) 中世土師質土器 (31~33) 近世陶磁器 (34~37)



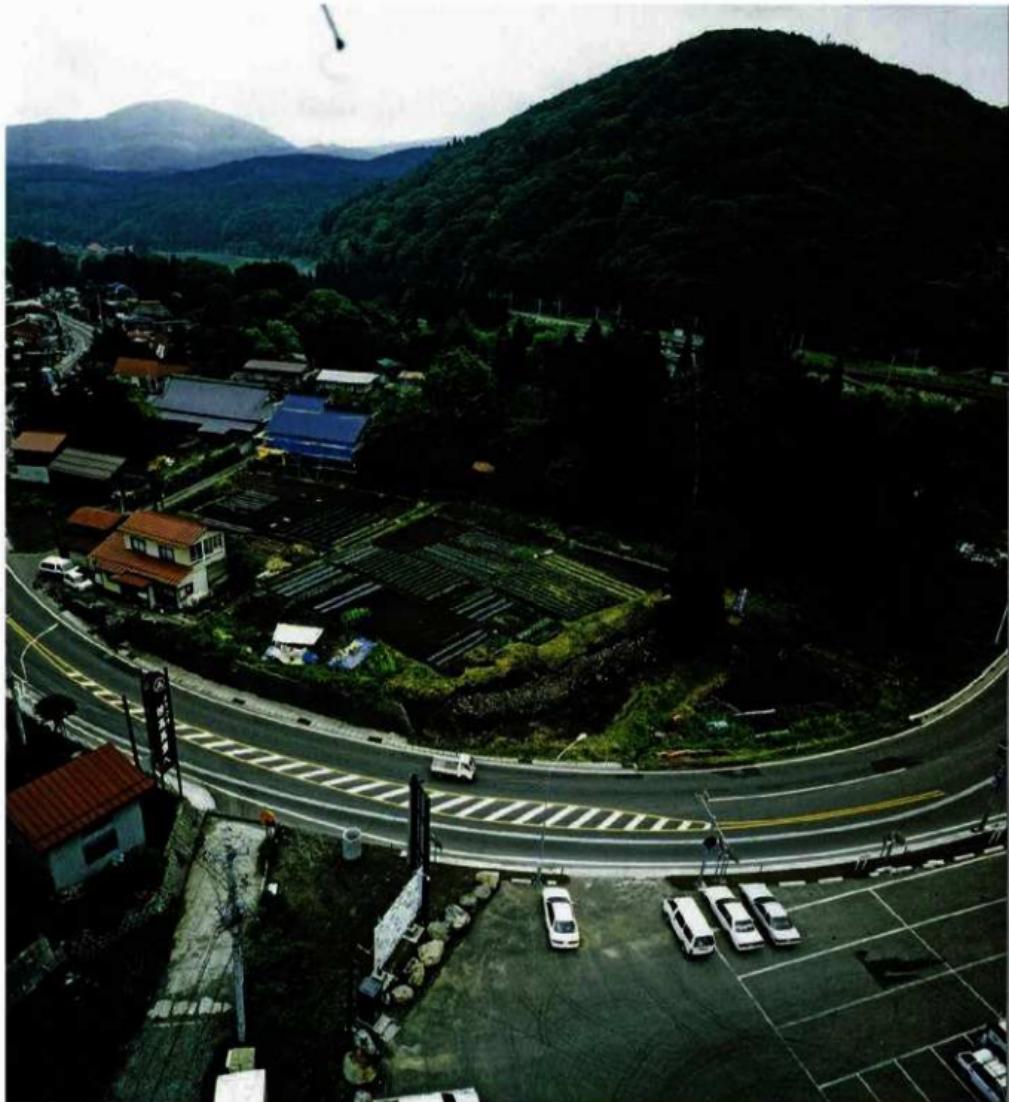
近世陶磁器 (38~59)



近世陶磁器 (60~64) 近世土師質土器 (65~69) 磚石 (70) 石塔 (71)



茶臼 (72) 石臼 (73~79)



関川關所跡全景航空写真



開所跡内現況



1区・石垣免振状況

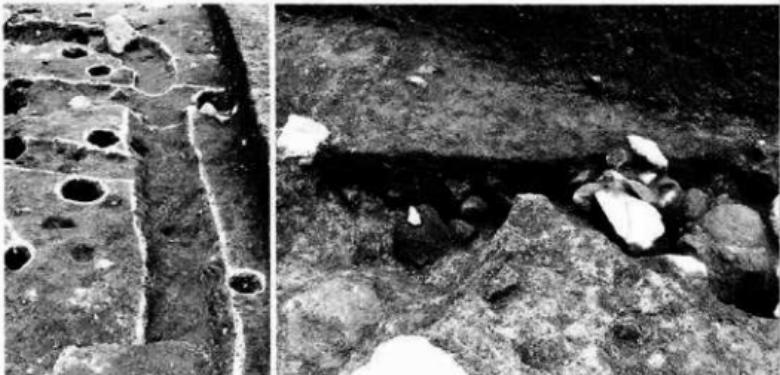


免掘作業風景

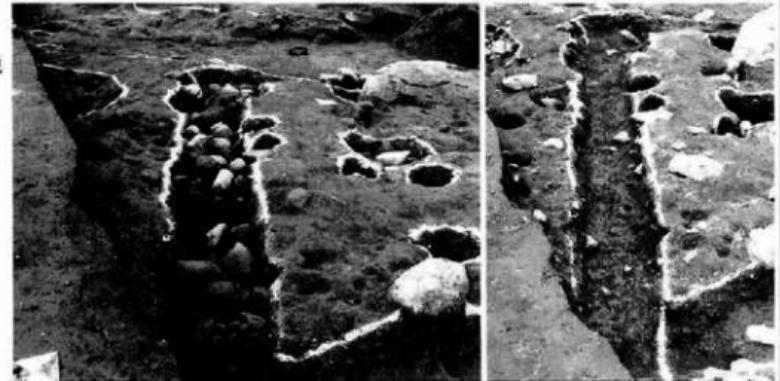
1区完掘状况



左 SD1 完掘
右 SD1・SD4
土層断面切り合い状況



左 SD4 石検出状況
右 SD4 完掘

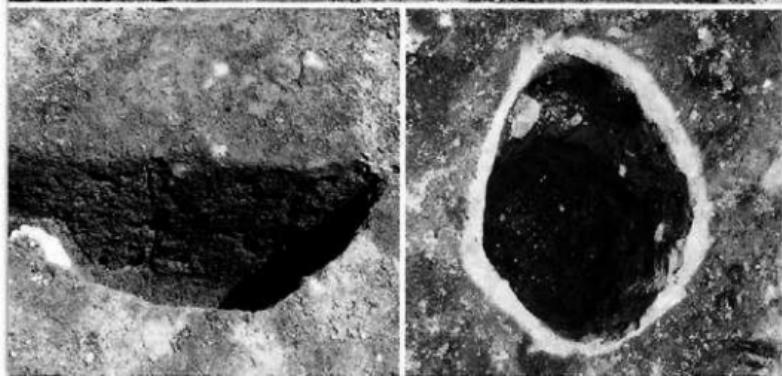




2区集石绘出状况



左 Pit40
右 Pit28



集石 4 檢出狀況



集石 4 土層断面



集石 4 完掘





S区石核出状况



S区完掘状况



左 SX1 石核出状况
右 SX1 土层断面

関所跡石垣



石垣調査前の状況



石垣清掃後の状況



石垣完掘

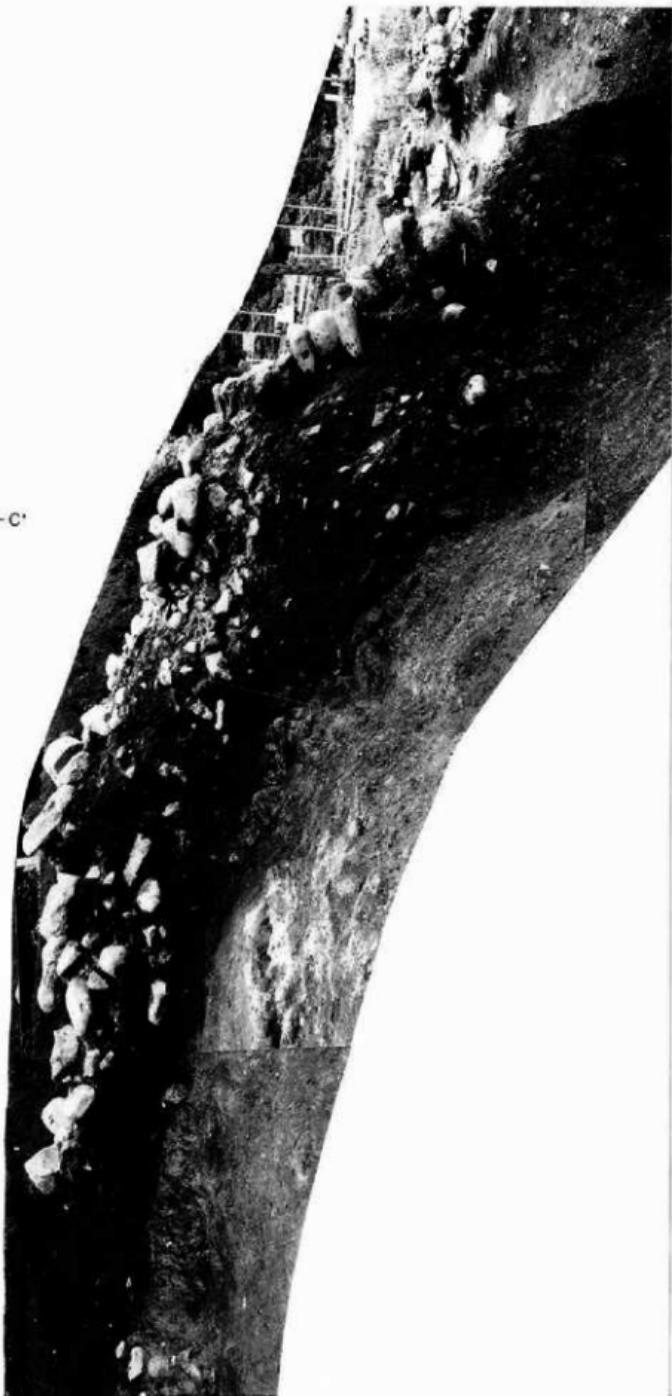


石垣完掘上段



石垣上段溝状遺構
(S.D.5)





石垣土層断面C-C'



左 石垣五輪塔(火輪)
利用状況
右 石垣上段
茶臼出土状況

石垣中段発掘状況



石垣中段
土層断面B-B'



石垣中段
石検出状況



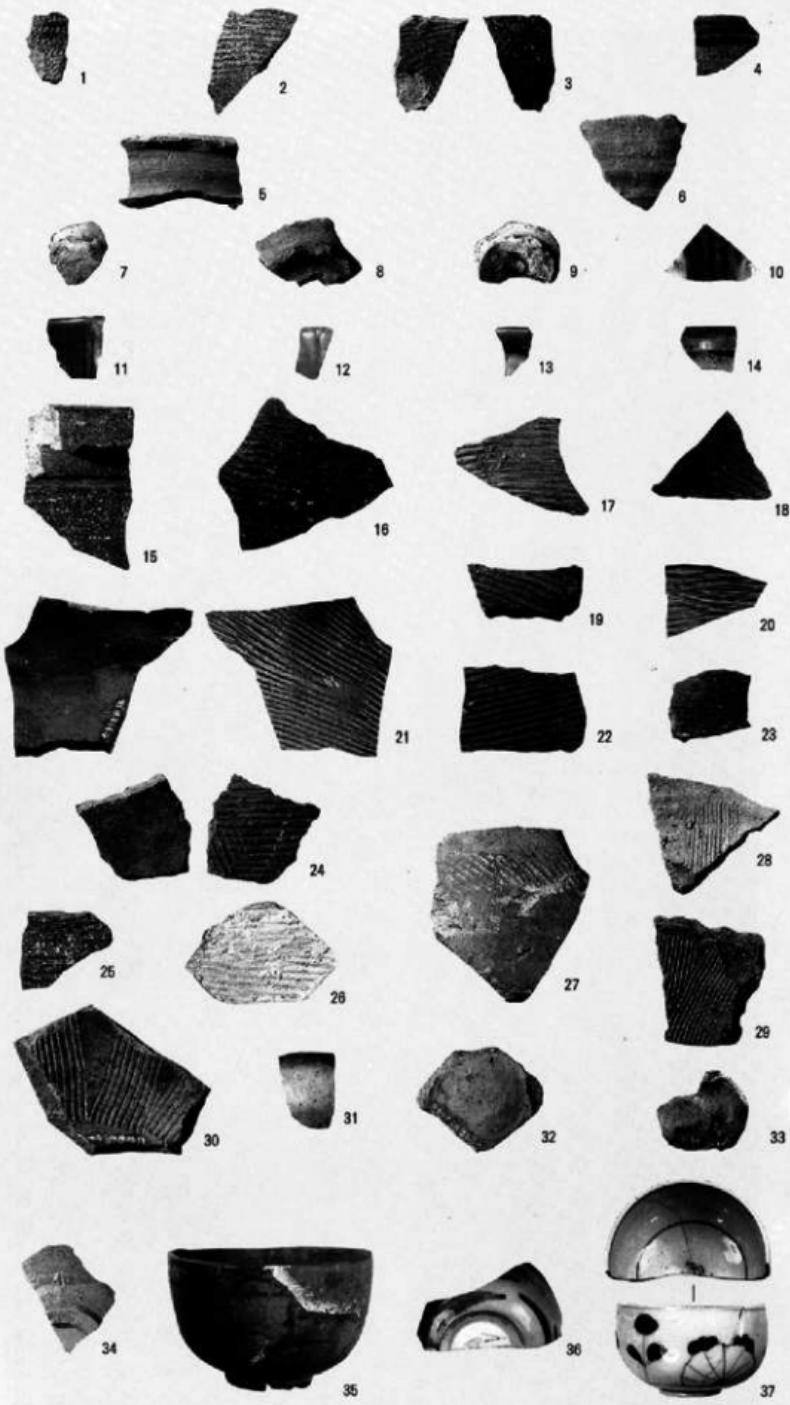
石垣中段
積石土層断面
 $E-E'$



石垣 振形状況

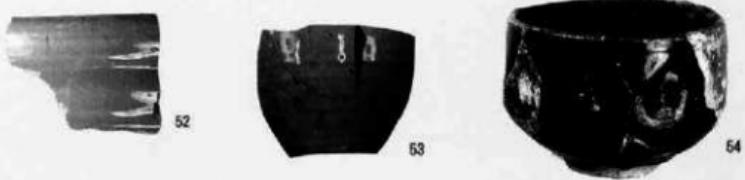
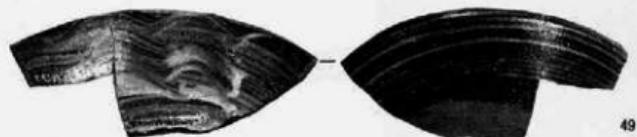
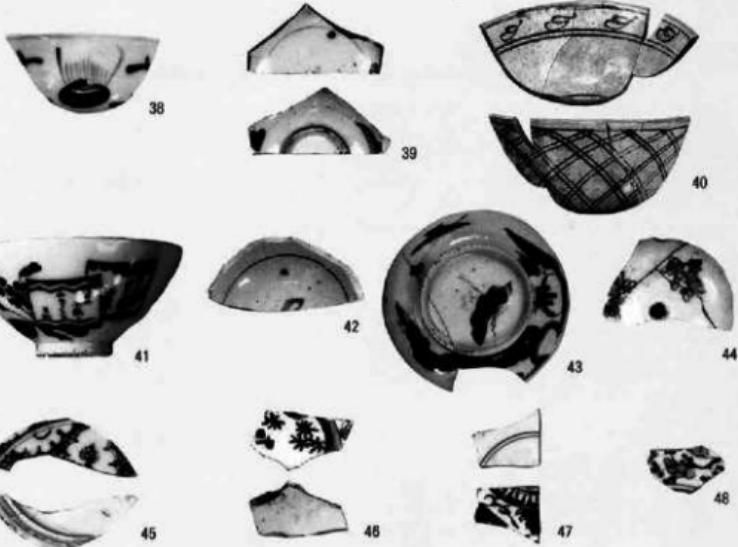


土器・
陶磁器
(1 : 3)



繩文土器
(1)
須恵器
(2~5)
土師器
(6~9)
青磁
(10~14)
珠洲焼
(15~29)
越前焼
(30)
中世土師質土器
(31~33)
近世陶磁器
(34~37)

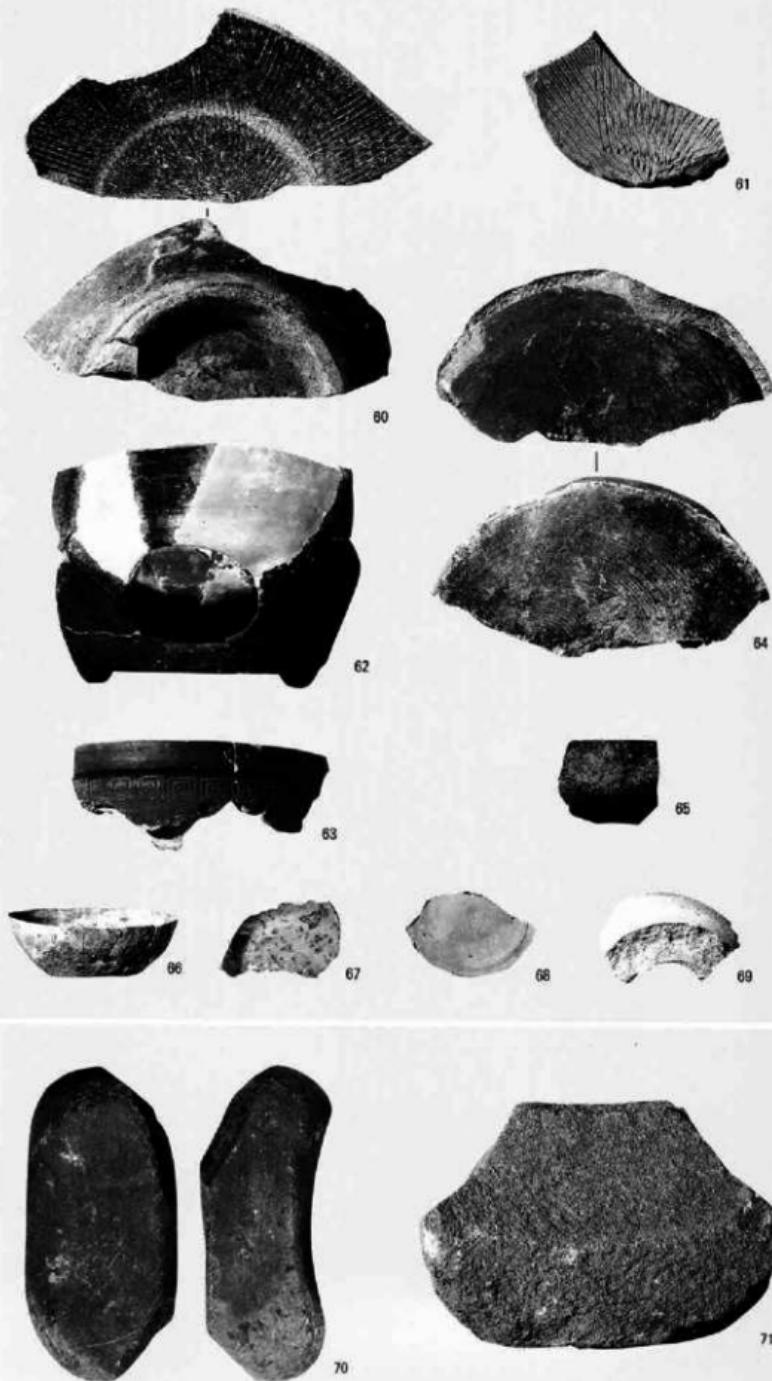
土器・
陶磁器
(1:3)



近世
陶磁器
(38～
59)



土器・
陶磁器
(1:3)
石製品
(1:4)

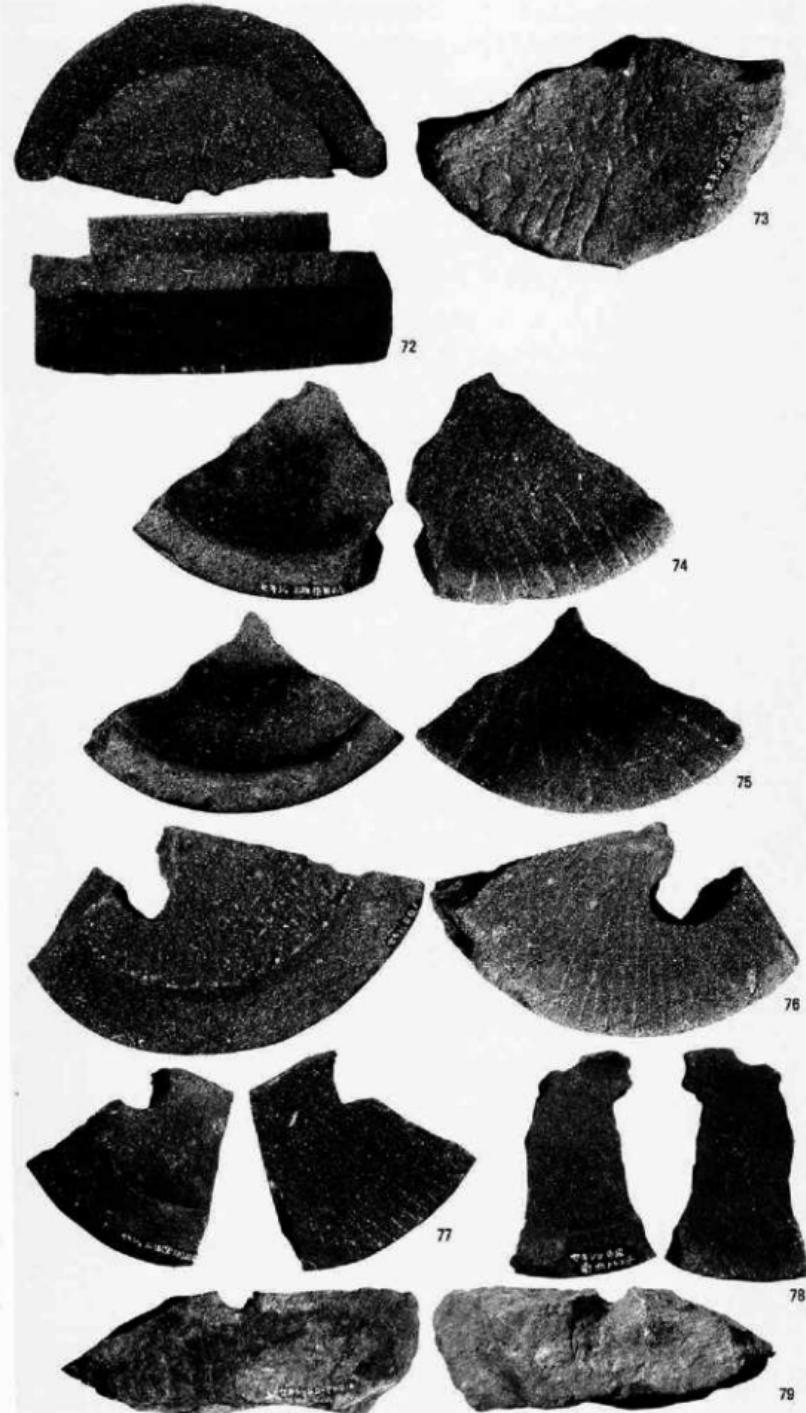


近世
陶磁器
(60~
64)

近世
土師
質土器
(65
~69)

砥石
(70)
石塔
(71)

石製品
(1:4)



書名	せき かわ せき しょ あと 関川関所跡						
副書名	国道18号線視距改良工事発掘調査報告書						
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第63集						
編著者名	小田由美子・三浦泰介						
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団						
所在地	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 平951 新潟市西区一番堀通町5923-46 〒951-223-5642						
発行年月日	西暦 1994年3月31日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村: 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
関川関所跡	新潟県中頃郡 妙高高原町 大字関川311-1 ほか	15-545	36度 51分 06秒	138度 11分 53秒	第一次調査 1991年5月15日～1991年6月16日 第二次調査 1992年6月8日～1992年6月21日	28m ² 600m ²	国道18号線視距改良工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
関川関所跡	関所跡	平安・中世 近世 18世紀後半 ～19世紀前半	石垣 配石溝 3条 集石 4基 柱穴	土師器・須恵器・青磁 珠洲焼・土師質土器 近世陶磁器・茶臼・石臼	近世に機能した関川関所の跡である。		

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第63集
国道18号線視距改良工事発掘調査報告書

関川関所跡

平成6年3月30日印刷
平成6年3月31日発行

発行 新潟県教育委員会
〒950 新潟市新光町4-1
電話 025(285)5511
動新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒951 新潟市一番堀通町5923-46
電話 025(223)5642
FAX 025(228)1762
編集 新潟県埋蔵文化財調査事業団
印刷 伊双葉印刷
〒950 新潟市鶴川原1-4-13
電話 025(283)7373